とくみ

——伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻——

とくさ

――伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻――

平成七年七月八日(土)―九月十日(日)
宮内庁三の丸尚蔵館

目次

あいさつ ―― 3

絵巻『をくり』――物語と画師・岩佐又兵衛について―― 4

図版 ―― 9

絵巻『をくり』――作品の概要と特徴など―― 60

〔資料1〕各巻の内容 ―― 65

〔資料2〕各巻の法量 ―― 71

Illustrated Scroll *Okuri* ―― iii

Foreword ―― ii

凡例

一、本図録は、平成七年七月八日(土)から九月十日(日)までを会期とする展覧会「をくり―伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻」の解説図録である。

一、図録の図版は、絵巻の物語展開に沿って構成しており、展示の場面とは一致しない。

一、展示期間中、作品の巻替を行う。

一、各巻の各段の内容、及び法量の詳細は、巻末の資料にまとめた。

一、本展覧会の企画及び図録の編集及び解説は、三の丸尚蔵館学芸室研究員・松本彩が担当し、同専門員・平林盛得の協力を得た。

一、写真は、松野正雄(宮内庁嘱託、コニカ㈱)の撮影による。

あいさつ

当館所蔵の絵巻作品の中でも、『をくり』(小栗判官絵巻)は、全十五巻、全長が約三二四メートルにも及ぶ、近世初期の優れた大作として知られています。この絵巻を制作した画師は、江戸時代初期、題材や描法を自在に使い分けて独特の画風を表わし、とりわけ絵巻は濃彩で華麗な長大な作品が多いことで知られる、浮世又兵衛こと岩佐又兵衛勝以と伝えられ、この点においても注目されてきました。しかし、これまでその全貌を紹介される機会に恵まれず、旧御物の中でも、名のみが知られた名品でした。今回の展覧会では、説経節「をくり」を題材としたこの絵巻を、全巻にわたって、出来る限り、その物語の展開に従いながら、優れた描写場面を中心に紹介することとしました。

この絵巻『をくり』は、詞書が人形浄瑠璃の語り調子で書かれ、独特のリズム感で展開していきます。その展開にともなって登場する人物は実に生き生きとした表情で描かれ、執拗な場面の展開に見られる描き分けは、まさしく劇画的とも言えましょう。

このたびの展観を一つの機会として、今後、この作品が説経節「をくり」について、また岩佐又兵衛について、様々な分野で新たな資料として研究されると同時に、多くの方々に、絵巻のおもしろさとその魅力を鑑賞していただければ幸いです。

平成七年七月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第8回　をくり―伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻―）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	をくり	岩佐又兵衛	十五巻	江戸時代初期（17世紀）	p. 10-58

絵巻『をくり』――物語と画師・岩佐又兵衛について――

絵巻『をくり』は、説経節「をくり」を題材とし、主人公・小栗判官と照手姫の物語が、濃彩で緻密な描写によって華麗に、劇画的に展開される、魅力的な作品である。題材のおもしろさ、つまりは物語展開のおもしろさを、画師がどのように描写して画面を展開しているか。今回の展覧会では、このような観点で絵巻『をくり』を紹介する。

一　説経節「をくり」について

説経節とは、中世頃から行われていた語り物である。古くは、庶民に仏教の教えを説くにあたって、譬喩や因縁などの説話のかたちで判り易く語られていたものが、やがて文学（唱導文学）としても成長していく。そして一方で、中世には聖や山伏、絵解法師、熊野比丘尼などの語りの担い手たちによって、社寺の縁起や神仏の霊験譚などが、人々に判り易く語り歩かれていた。そして、これらの語り物の中に地方の固有信仰や伝説などが取り入れられ、その中身は雑多にはなるけれども、庶民に親しまれる興味深い内容の語り物が多く生まれることとなったのである。語り物は、より効果的に人々に浸透させるために音楽や舞をも伴って発達し、室町時代の観阿弥や世阿弥による能や狂言といった、いわゆる芸能の成立、発達にも大きく関与している。

そうした中で、室町時代頃に篠（ささら）を摺りながら語る放浪芸能民が登場していた。彼らの語りの冒頭には必ず本地語りを持ち、由来や霊験を語ることから、唱導文学・唱導芸能の一種と考えられ、これが説経節の古い形（古説経）であると見られている。その内容は決して貴族の趣味に合うものではなく、むしろ陰惨、グロテスクなものであったが、これらが中世末から近世にかけて操り芝居や人形浄瑠璃などの芸能の題材として取り上げられて脚光を浴びるようになった。本絵巻の題材である「をくり」もその一つで、「山椒太夫」などと共に、江戸時代には五説経の中に数えられている。

説経節「をくり」は、延宝三年（一六七五）刊行の「おぐり判官」などの諸本があるが、これらの中でも最も内容が詳しく、古型を残しているのが、本絵巻の詞書である。詞書冒頭には、ごく初期の人形操りの演出形態を表わす部分が見受けられ、寛永頃の古浄瑠璃の正本（テキスト）との共通性が指摘されている。それ故、絵巻の詞書は、人形操りに用いられた説経の正本の正確な写しである可能性が高いとされ、国文学の立場から、かねてより注目されるところである。

また説経節「をくり」の成立について、これまでの研究成果を簡単に紹介しておこう。この物語の主人公である小栗判官は、歴史上、常陸国に存在した小栗氏にその源がある。小栗氏は、常陸国、現在の茨城県の新治郡を拠点とし、平安時代末期に桓武平氏の流れをくむ氏族として成立したと考えられている。室町時代、応永二十三年（一四一六）、上杉禅秀（氏憲）が鎌倉公方・足利持氏と対立して乱を起こし、関東一帯は動乱の渦中となる。この時、氏憲派に加わった小栗満重は、氏憲の自害によって乱が一応終着した以後も、持氏に抵抗し続ける。結局、康正元年（一四五五）、足利成氏によって小栗城は攻め落とされ、小栗氏は滅亡する。

この鎌倉公方足利氏を中心とした関東の動静を記した歴史書に、「鎌倉大草紙」がある。文明十一年（一四七九）以後の成立と考えられるこの書の応永三十年（一四二三）の項に、小栗満重の持氏に対する謀叛について、次のような記事がある。

> 満重は持氏に謀叛し、持氏の攻撃によって城は落ち、満重は三河国へ落ちる。満重の息子・助重は密かに関東に留まり、相模国の権現堂で、近くの盗賊が集まっている所に宿をとる。盗賊は助重の財宝を奪おうと企て、遊女を集めて酒宴を催し、毒酒をもろうとする。遊女の一人、照姫は助重に同情してこの企てを助重に知らせる。企てを聞いた助重は、酒を飲んだふりをしてその場を逃れ、盗賊が近くの林に繋いでいた荒馬・鹿毛に乗って藤沢の道場（遊行寺）へ駆け込み、助けを求める。上人は時宗の僧侶二人をつけて、助重を三河国へ送る。その後、助重は三河国から戻って照姫を探し出して財宝を与え、盗賊を全て討伐した。助重の子孫は代々、三河国に住んでいる。

これが、現在知られている小栗伝説の最古のものである。この他、遊行寺山内にある長生院にも「小栗略縁起」が伝えられるが、ここでは主人公は満重で、その内容は本絵巻の物語にさらに近い内容となっている。これらの伝説に登場する遊行寺は時宗の総本山、熊野は開祖一遍が念仏の深い意味を悟った地で、いずれも時宗にとって重要な場所であり、従って小栗伝説は、時宗の聖らを中心とした語り手によって各地に広められたと考えられている。

説経節「をくり」は小栗と照手の恋愛譚がその物語展開の中心となって、江戸時代の元禄十一年（一六九八）、近松門左衛門の作で興行された人形浄瑠璃「当流小栗判官」によって一層有名になった。そして以後、浮世絵の題材や歌舞伎にも取り上げられるのである。

二　絵巻『をくり』の物語展開について

本絵巻は、全十五巻、全三一二段で構成される。詞書の翻刻は、本書では頁数

の制約上紹介できなかったが、既に「桂宮本叢書第十七巻　物語三」（宮内庁書陵部、昭和三十一年、養徳社）に掲載され、また注釈などを加えて、より読みやすく、判り易くしたものが「説経節　山椒太夫・小栗判官他」（荒木繁・山本吉左右編注、東洋文庫二四三、平凡社、昭和四十八年）に紹介されているので、詳細についてはこれらを参考にされたい。

本絵巻の物語は次の様に展開されていく。（各段の内容は65～70頁の資料1を参照）

〔第一巻〕

この物語は、美濃国安八郡の墨俣、垂井のおなこと社の神体である正八幡の荒人神の物語である。

京の公卿・二条兼家は、名門の家柄ではあるが、跡継ぎがなかったため、御台（妻）を鞍馬寺に参詣させ、毘沙門天より子を授かる夢告を得た。十ヵ月後、無事に男児が生まれ、有若と命名された。有若は十二人の御乳や乳母によって大切に育てられて成長する。兼家は、七歳になった有若を、学問修得のために東山へ行かせる。

〔第二巻〕

有若は東山一の学者と言われて十八歳となる。兼家は有若を東山から戻し、石清水八幡に参詣して元服させ、名を小栗と改めて常陸国を知行とした。母は小栗に御台を迎えようとするが、小栗は何かにつけて気にいらず、三年間に七十二人もの御台を迎えては返してしまった。そこで小栗は、定まった妻を授かるよう祈願しようと鞍馬寺へ参詣に出かける。その途中、深泥池の畔で小栗が横笛を奏でていたところ、深泥池の大蛇に見初められる。

〔第三巻〕

大蛇は十六、七歳の美しい姫に変化して、鞍馬寺に参詣した小栗の前に現われた。小栗はこれこそ毘沙門天の利生と、姫を輿に乗せて館に戻り、契りを交わしてしまう。その噂は京中に広まり、父・兼家は小栗を都に住まわすことは出来ないと、知行地である常陸国へ流した。

常陸国の侍たちは、毘沙門天の申し子である剛者の小栗にかしずき、判官の官職を差し上げた。ある日、諸国を巡っている商人・後藤左衛門が小栗の館を訪ねて来る。高麗や唐へも渡り、国内は三度も巡ったと話す左衛門に、小栗の家来は、小栗の御台にふさわしい人はどこかにいないかと尋ねた。

〔第四巻〕

そこで左衛門は、武蔵・相模両国を支配する横山という郡代には日光山参詣の申し子で、それは美しい照手という姫があり、小栗の御台にふさわしいと話した。小栗はまだ見ぬ照手に恋こがれ、左衛門の勧めに従って恋文をしたため、左衛門に託す。これを預った左衛門は、急ぎ照手のもとへ向かう。

照手の館に着いた左衛門は、小栗の文をまずは女房に差し出した。女房たちはその文を見て、理解出来ない文章と笑う。この笑い声を聞いて現われた照手に、女房は扇に文を載せて届けた。

〔第五巻〕

照手はまず文の上書きの様子を誉め、難解な文面を解読して女房たちに聞かせる。しかし、その文が小栗から自分への恋文と知って文を破り捨て、御簾の奥に隠れてしまう。女房たちは左衛門を責めるが、左衛門はそのようなことをしては照手に後生の災いが及ぶと威した。照手はこれを聞いて再び姿を現わし、これまで殿方からの求めに応じなかったことや、父や兄に知られて悪事が起こることを心配したが、返書をしたためた。左衛門は、この返書を急ぎ小栗のもとへ届けた。小栗は照手の返書を見て、照手の了承を得たと喜ぶ。小栗は十人の屈強な家来を選りすぐり、横山の許しなく婿入りを決めて出かける。左衛門には道案内させ、褒美を与えた。小栗は照手の住まいに入り、二人は結ばれる。

〔第六巻〕

このことを知った横山は五人の息子を集めて、小栗のことを問う。怒る横山に、長男のいえつぐは、小栗を婿として認めて味方とした方が良いととりなす。三男の三郎は、小栗を酒宴に招いて鬼鹿毛（横山の持ち馬で、人を食い殺す荒馬）に乗馬することを所望し、その犠牲にしてはどうかと提案する。横山は三郎のこの企てを誉め、早速照手の住まいに使者を送った。小栗は使者の来訪を喜び、十人の家来と共に都様の衣装で出かけた。横山の屋敷で小栗は丁重にもてなされるが、やがて横山の持ち馬への乗馬を所望される。小栗は厩に向かうが、堰の向こうに鬼鹿毛がいた。人骨や黒髪が散乱する有様を見た小栗は、横山の企てを察知する。十人の家来たちは力を示すために小栗に乗馬を勧めるが、小栗は力業だけでは無理と考え、鬼鹿毛に、うまく乗馬させてくれたなら死して後には馬頭観音として祀ろう、と言い含める。この言葉に涙を流す鬼鹿毛の様子を見て、小栗は厩の鉄格子を自力で開け、鞍も着けずに乗馬した。

〔第七巻〕

小栗は鎖を手綱に鬼鹿毛を進ませた。この様子を見て、小栗の十人の家来は喜んだが、横山の家来たちは驚く。三郎は主殿の屋根に十二段の梯子を懸けてこれに登るよう招く。小栗は鬼鹿毛に乗ったままで梯子を登り、主殿の屋根を駈け、再び梯子を乗り降ろした。次にいえつぐは、松の大木への乗り上げを所望するが、小栗はこれも見事にさばく。障子の上は骨も折らず、紙も破らず乗りさばき、碁盤の足

にも見事に乗せた。鬼鹿毛はすっかり小栗に降参して桜の古木に繋がれた。小栗はもとの座敷に戻って鬼鹿毛を誉めたが、横山一同苦笑する。ところが鬼鹿毛が桜の古木を引き抜いて再び武蔵野に駈け出した。小栗が呪文を唱えると、鬼鹿毛は小栗の前に跪いたので、小栗は鬼鹿毛を厩へ戻して錠をかける。そして小栗は照手のもとへ戻った。

一方、横山と家来たちは、小栗をどうするかを相談し、三郎の提案により、蓬莱山の宴を催して小栗らに毒酒をもることを企てる。

〔第八巻〕

横山は再び照手の住まいに使者を送るが、小栗は了承しない。七度目に使者として三郎が来たので、小栗は承知する。しかし照手は、不吉な夢を見たので出かけないでほしいと、夢の内容を話す。一度目は当家に伝わる唐鏡を鷲が割った夢、二度目は小栗の短刀が折れた夢、三度目は鷲が小栗の弓を三つに折ってその一つを卒塔婆として立てた夢、さらに過夜には小栗らが死装束で北へ向かう夢を見た、と話す。小栗はそれでも出かけない訳にはいかないと、夢違の呪文を唱え、十人の家来と共に出かけて行った。小栗らと横山らは酒を汲み交わすが、小栗は来宮信仰の日なのでと、酒を断る。横山は、碁盤の上の一対の法螺貝は武蔵と相模の両国のようであり、半分ずつを飲み分けよう、飲酒の罪は私が負うと言って、舞を舞う。小栗はこれを聞いて盃をとるが、横山は銚子に毒酒を混ぜる。小栗と家来らはこれを飲んだため、次々と倒れ、小栗は二十一歳の若さで絶命する。横山は占いによって、直ちに小栗を土葬に、家来十人を火葬にした。

そして横山は、人の子を殺してわが子をそのままという訳にはいかないと、照手を相模川のおりからが淵に沈めるよう、鬼王と鬼次の兄弟に命ずる。兄弟は照手のもとへ赴き、小栗の死を告げる。照手は、不吉な予感が当たってしまったと号泣し、兄弟に形見を渡して供養を願う。

〔第九巻〕

照手は自ら牢輿に乗った。御乳や乳母らは御供したいとすがりついて泣いた。相模川に着くと、兄弟は牢輿を小船に乗せておりからが淵まで漕いだが、照手を沈める決断ができず、沈め石を切り離して牢輿を流した。牢輿の中で照手は、観音の経を唱えていた。観音はあわれと思い、ゆきとせが浦(現、横浜市内か)に漂着させる。照手はゆきとせが浦の太夫(漁夫の長)に助けられて引き取られる。しかし太夫の姥(妻)は、照手を妬む。蜑(あま、塩焼小屋か)に照手を入れて一日生松葉で燻べるが、千手観音の加護を受ける照手はなおも美しい。とうとう六浦が浦(横浜市)の商人に売ってしまった。姥は漁から戻った太夫に言い訳をするが、嘘を見抜かれて離縁され、太夫は行者になって山里に修行に入ってしまう。売られた照手は、さらに鬼が塩谷、岩瀬、水橋、六渡寺などを経て、さらに能登半島へと売られていく。

〔第十巻〕

照手はさらに、金沢、小松、三国湊、敦賀、大津へと価を増しながら売られ、美濃国の青墓の宿(大垣市青墓付近)、万屋の君の長のもとへ売られ着いた。君の長は、照手に常陸小萩と名付け、遊女の勤めをせよ、と十二単衣を与えるが、照手は嘘をついて断る。君の長は照手に、十六人分の水仕の仕事を一人でやるのと、遊女の勤めとどちらを選ぶかと問うが、照手は水仕の仕事を選ぶ。照手は馬や馬子の世話、遊女の世話などとこき使われるが、常に千手観音の加護を受けた。念仏を唱える照手に、遊女たちは念仏小萩とあだ名して命令し、休む暇なく三年が過ぎる。

一方、小栗は家来十人と共に、冥途へ送られて閻魔大王の前に引き出される。大王は、小栗は娑婆では悪事をしてきたから悪修羅道へ落とし、家来らは小栗のための非法の死であるから娑婆へ戻そう、と裁く。しかし家来たちは、小栗一人を娑婆へ戻して頂ければ本望、と大王に訴えた。大王はこれを聞いて、ならば皆を戻してやろうと言うが、日本には家来の身体は火葬されて残っていないという大王の家来の報告に、大王は小栗の家来十人を自分の脇侍とすることとする。

〔第十一巻〕

閻魔大王は小栗を娑婆に戻すことを決め、「この者を藤沢の上人に渡すので、熊野本宮の湯の峯に入れてやってもらいたい、湯の峯に入ればもとの姿に戻るだろう」と胸札に書き記した。そして大王は杖で虚空を打った。

上野が原では、三年が経った小栗塚が割れ、小栗は餓鬼姿となって這い出てきた。小栗を見つけた藤沢の上人は、横山一門に知られないよう、小栗の髪を剃り、餓鬼阿弥と名付けた。そして胸札の閻魔大王の自筆を読み、「この者を一引きすれば千僧供養、二引きすれば万僧供養となる」と胸札に書き加え、土車を作った。土車に餓鬼阿弥を乗せて手綱を付け、上人自ら手綱を引いて上野が原を出発した。相模畷では、横山家中の侍が照手の供養にと車を引いた。餓鬼阿弥は小田原、箱根、三島、沼津、富士、清水と、熊野目指して東海道沿いに諸国を引かれ続けて行く。

〔第十二巻〕

さらに静岡から藤枝へ、掛川、袋井、豊橋、岡崎などを経て、名古屋、岐阜羽島と引かれ続け、美濃国青墓の宿で、君の長の館前に三日間打ち捨てられた。これを見つけた照手は胸札を読んで、亡き夫・小栗の供養のために引きたいから、三日間の暇が欲しいと考える。照手はこのことを君の長に話すが、君の長は、遊女の勤めを断ったので暇は取らせない、と言う。照手はさらに、君の長夫婦に悪事があれば自分が身代わりになるからと情けを請い、五日間の暇を許される。照手はこのままの姿で引いて、所々であだ名されては困ると、狂女の姿に擬して引き始めた。照手と

餓鬼阿弥は、美濃と近江の境を経て、彦根へと入る。

〔第十三巻〕

さらに近江八幡、草津、瀬田、石山、大津まで共に行く。関寺の門前で共に最後の夜を過ごし、照手は餓鬼阿弥の胸札に「本復されたら美濃国青墓の宿の君の長の館の常陸小萩という者を訪ねて下さい」と書き添えて、餓鬼阿弥と別れる。餓鬼阿弥は、さらに山科、京、山崎、天王寺、住吉、堺を経て、紀州国内を大峯山まで引かれた。大峯山中は、修行の山伏に背負われて進み、四百四十四日目、とうとう熊野本宮の湯の峯に入った。効能豊かな湯に入って、七日目には両眼が開き、十四日目には耳が聞こえ、二十一日目には口がきけるようになった。そして四十九日経つともとの小栗の姿に戻った。

小栗は夢から覚めた心地で熊野三山の修行に入るが、これを見た熊野権現が山人に化身して小栗の前に現われる。そして、運を開くという金剛杖を小栗に渡して、姿を消した。小栗は権現に礼拝し、京へ向かう。

小栗は、父・兼家の館前にさしかかって斎料を求めるが、門番に追い払われる。この様子を東山の伯父御坊が見かけていた。

〔第十四巻〕

伯父は、兼家の御台を呼び、今日は小栗の命日、斎料を取らせなさいと言って、小栗を呼び返す。母に対面した小栗は、名乗りでて勘当の許しを請う。御台は驚いて兼家にこのことを告げた。兼家は、本当に小栗なら幼い頃から教えて来た調法があるはずと、障子の向こうから矢を放つ。この矢を見事に受け止めた小栗は、父と対面して勘当の許しを請う。再会に一堂は喜び、父子は帝の館へ参上する。小栗は帝より五畿五国を与えられるが、小栗は美濃国を頂きたいと話す。帝は子細があるのだろうと、美濃国は馬の飼料として重ねて与えた。一家は喜び祝う。

そして小栗は、奉公する者を募って三千人を集め、美濃国へ赴いた。宿を君の長の館にすることを予告すると、君の長は百人の遊女に装わせて待った。しかし小栗は、遊女のもてなしには取り合わず、常陸小萩を酌に来させるよう、君の長夫婦に命ずる。君の長は照手を呼び、酌を断れば我々に悪事が及ぶかもしれない、と話すので、照手はしかたなく承知する。十二単衣を着るように言う君の長に対して、照手は水仕の姿のままで酌に向かった。小栗は、常陸小萩に自分の身の上を話す。それを聞いて夫の小栗と判った照手は、自分の身の上を話し、互いに逢えたうれしさに号泣する。

〔第十五巻〕

小栗は、君の長の照手に対する扱いを知って、死刑にすると言う。

照手はこれを聞いて、君の長は三日間の暇の願い出に対して五日の暇を下さった慈悲深い人であるから、むしろ褒美を与えて下さい、ととりなす。小栗は君の長に美濃国の領地などを与えた。君の長は喜んで祝宴を催し、さらに遊女の中から三十二人を選りすぐって、照手の侍女として従わせた。

常陸国へ戻った小栗は、七千人を集めて横山を攻めると告げた。横山は驚いて、城郭を築くなどして備えた。この様子を聞いた照手は、父母に弓を引くことは出来ないと、小栗の横山攻めを止めた。小栗は照手に免じてこれを止める。照手の内密の書状でこれを知った横山は、子に勝る宝はないことを思い知り、黄金を鬼鹿毛に積んで小栗のもとへ送った。そして三郎に縄をつけて小栗の前へ引き出した。小栗は、黄金で寺院を建立して、鬼鹿毛を馬頭観音として祀った。三郎はその罪を罰し、荒筵に巻いて海に沈めた。

さらにゆきとせが浦に赴き、照手を売った姥は肩から下を土中に埋めて竹鋸で首を引かせ、太夫には褒美を与えた。

再び常陸国へ戻った小栗は、大きな屋敷を構えて二代にわたって富み栄え、八十三歳で大往生する。あらゆる神仏がその供養に集った。

そして小栗は、美濃国安八郡の墨俣、垂井のおなこと社に正八幡の荒人神として祀られて、末長く崇拝されている。また照手も、その十八町下に、縁結びの神として祀られている。

三　岩佐又兵衛について

この絵巻を制作した画師は、江戸時代初期の異色の画家・岩佐又兵衛勝以（天正六年〔一五七八〕～慶安三年〔一六五〇〕）と伝えられている。この絵巻が彼自身によるものかどうかについては、後に本絵巻の特徴などと関連して考察することとする（60頁以降参照）が、少なくとも〝又兵衛風〟といわれる特色――豊頬長頤の顔、手や足先が反り、衣の裾が翻るなど――が表われ、彼自身、もしくは彼周辺の画家によることは疑いない。そして又兵衛風の華麗で長大な絵巻群――又兵衛風古浄瑠璃絵巻群と呼ばれる――に、『山中常盤』『堀江物語』『上瑠璃』と並んで、この『をくり』が含まれる。画家として謎の多い又兵衛を考える時、この絵巻群もその在り方を捉える上で重要な作品である。狩野派とか土佐派といった流派には属さず、個性的な画家として評価が高く、事実この時期にかなりの活躍をした岩佐又兵衛という画家について、まずその生涯から簡単に紹介しておこう。

又兵衛の生涯については、明確な部分が少ないが、これまでの先学の研究によって、おおよそ次のようであったかと考えられている。

又兵衛は、摂津・伊丹城主、荒木村重の末子として、天正六年に誕生。村重は、織田信長の信任篤い武将でありながら、この年の十月、毛利輝元や石山本願寺と

通じて信長に反逆する。信長は伊丹城を攻めて落城に追い込むが、村重は脱出、城中の者は全員処刑され、一族は幼子に至るまで、京の六条河原に引き出されて首をはねられたという。その中に村重の側室かと思われる〝たし〟という二十一歳の女性がいた。彼女の辞世の歌に詠まれた〝みどり子〟が、当時二歳の又兵衛であったと考えられている。又兵衛は、落城間際に乳母によって救出されて京都の本願寺教団のもとにかくまわれ、その後、京で成長したと伝えられている。

又兵衛の京都における成長過程は不詳である。後年の彼の手記『廻国道之記』の中で、天正十五年に行われた豊臣秀吉の北野大茶会の様子を懐しんだり、織田信長の子・信雄の伴をして関白二条昭実宅での詩歌管絃の集いに出席した折のことが回想されていることから、信雄に近習小姓役か御伽衆というような立場で仕えたとも伝えられる。ともかく成人して、姓を母方の姓ともいわれる岩佐、名を勝以とした彼は、文化の素養を十分に学べる環境の中で成長し、その中で画才を伸ばしていったと推察されるのである。

彼の画の師についても不詳で、山東京伝の『追考浮世絵類考』(一八〇二)が、その最初の師を狩野内膳重信(一五七〇〜一六一六)と記しているにすぎない。しかし、彼自身がその遺品に「土佐光信末流」と記していることや、本格的な大和絵の画風からは、土佐派の画人に学んだ可能性も考えられる。いずれにしても、狩野派とか土佐派といった流派にこだわらない自由な立場で、和漢の古典から習得した様々な画題や手法に、彼独自の画風を示している。

元和初め頃(一六一六〜七年頃)には、又兵衛は福井(当時は北之庄)に赴く。福井の本願寺派寺院・興宗寺の僧・心願が京に赴いた折に親しくなったのが動機と言われる。当時の北之庄城主・松平忠直は、家康の孫に当たるが、乱行によって元和九年に豊後国へ配流となった。忠直の追放後、福井と改めたこの地は、忠直の弟・忠昌が拝領して治めたが、又兵衛はこの二代にわたって、約二十年間を福井で過ごしたと考えられている。この間に、通称『金谷屏風』(押絵貼六曲屏風。豪商・金谷伝右衛門が、忠昌の弟・直政を養育した功績により賜ったといわれる。現在、掛幅十二幅となって東京国立博物館他に分蔵)、『人麿・貫之図双幅』(MOA美術館)、通称『池田屏風』と『樽屋屏風』(いずれも押絵貼八曲屏風、諸家分蔵)、『和漢故事人物図巻』(現在は掛幅装、福井県立美術館)などの代表作品を遺している。

そして、又兵衛の活躍ぶりは江戸まで届いてその名声は高まり、寛永十四年(一六三七)、わずかな弟子を伴って江戸へ向う。これは同十六年九月、将軍・家光の娘・千代姫が尾張徳川家に嫁ぐにあたって持参した『初音蒔絵調度』(徳川美術館)の下絵を依頼されたからとも伝えられている。また、同十五年に焼失した川越の仙波東照宮の復興にあたって、拝殿に掲げる歌仙絵の額絵を制作している。この額背面に「寛永拾七年庚辰年六月十七日　絵師土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝以図」と署名が残され、又兵衛の遺品の中で、唯一制作年が明らかな基準作例となっている。

その後、又兵衛は江戸・京都・福井の工房に多くの画師をかかえて、歌仙絵や風俗画などを中心に多くの作品を制作して、全国的に人気を集めた。慶安三年(一六五〇)六月、江戸において七十三歳で没している。

この又兵衛の制作活動において、その工房の存在は重要な位置にあったが、長大で華麗な絵巻——又兵衛風古浄瑠璃絵巻群——の制作においても無くてはならない存在であったはずである。又兵衛の絵巻の大きな特色の一つに、場面が実に劇画的に展開していくことが挙げられる。平安時代後期の絵巻の名品、『信貴山縁起絵巻』や『伴大納言絵巻』に見られるような次場面に期待を抱かせる魅力的な絵巻展開法と、同時期の『粉河寺縁起絵巻』の物語の内容を淡々と繰り返して描写する素朴な展開法の、両者の特色を兼ねあわせているのが、この絵巻『をくり』の展開法であろう。物語の内容が執拗に、まるでアニメーションのセル画でも見るように、実にゆっくりと展開していく。それは、前記したような古典作品を十分に学習した上で、浄瑠璃という実演の題材を絵巻に取り上げ、巻物という形態の特色を十分に活かして場面展開を考えた、彼の独創といっても過言ではあるまい。故に描写も躍動感に溢れている。実に魅力的としか言いようのない絵巻が出来上がっているのである。

江戸時代初期の絵巻は、一般的にはあまり評価されていない。しかし、絵巻物という視点からは、最近見直されている室町時代の絵巻とあわせて、又兵衛風絵巻群は再評価されるべき作品群であろう。この絵巻『をくり』は、その一翼を担ってくれるのに、十分、魅力的な絵巻と確信する。

松本　彩(まつもとあや／当館学芸室研究員)

図版

発端、京の公卿・二条家の繁栄　第1巻 第1段

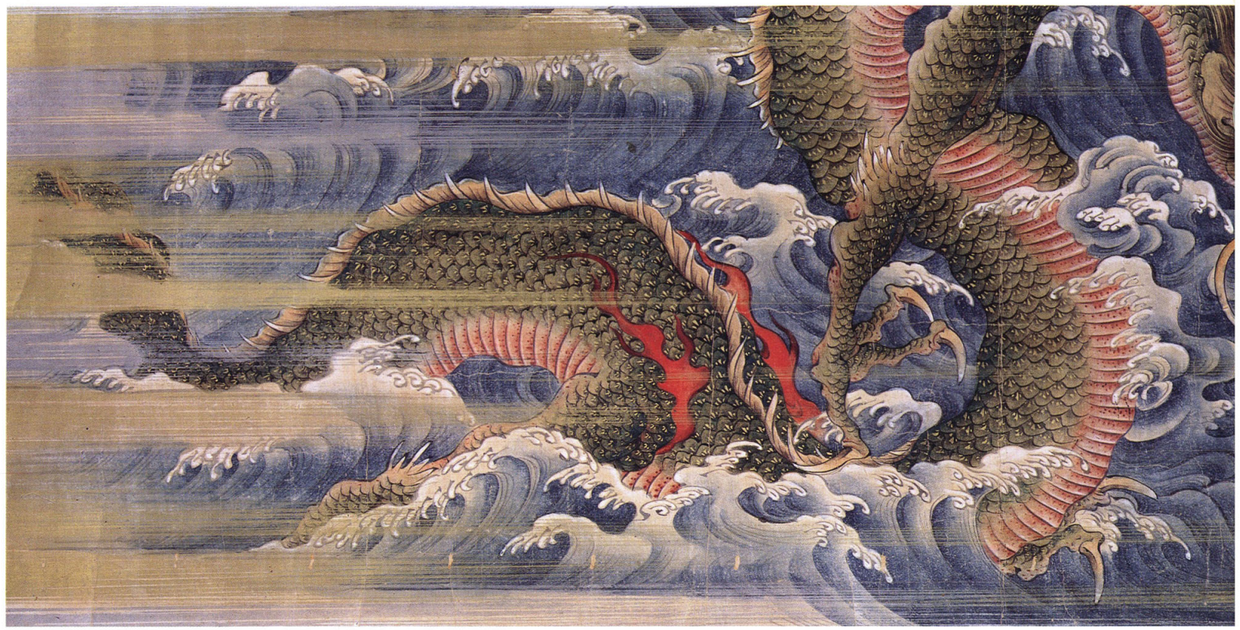
二条兼家の妻は鞍馬寺に参詣し、毘沙門天の夢告を得る　第1巻 第3段

若君の誕生　第1巻 第5段

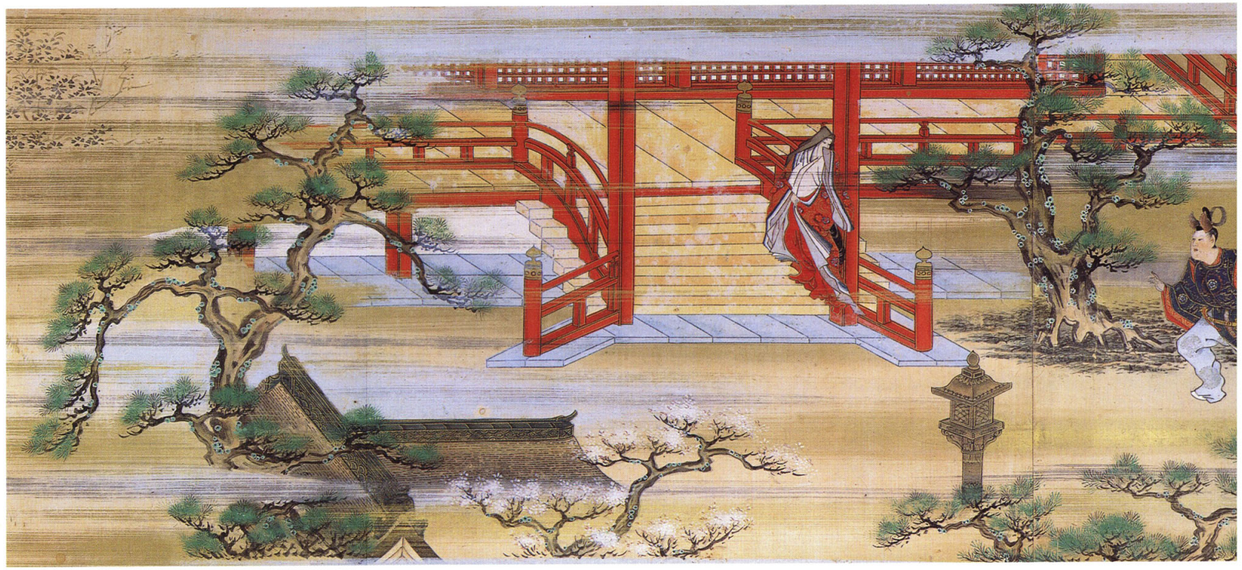
若君に産湯をとらせて射払いをする　第1巻 第6段

有若は石清水八幡の神前で常陸小栗と命名される　第2巻 第3段

小栗は三年間に七十二人の妻を返してしまう　第2巻 第5段

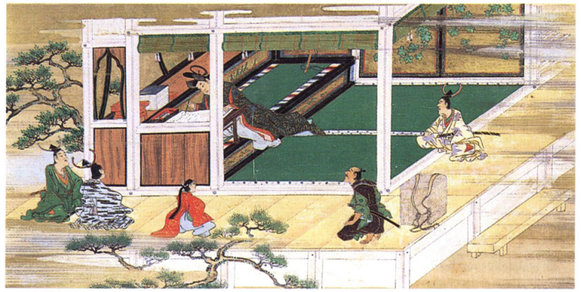


深泥池の大蛇が小栗を見初める　第2巻 第9段

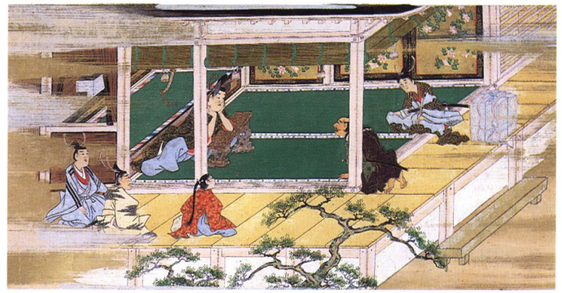


大蛇は美女に変化し、小栗を誘惑する　第3巻 第1段

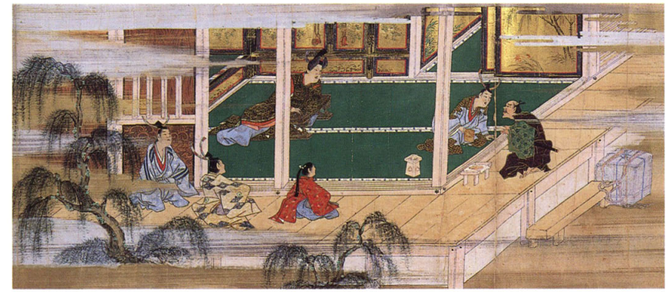
小栗は常陸国へ流され、判官となる　第3巻 第6段



小栗は照手へ恋文を書く　第4巻 第3段



左衛門は小栗に照手のことを話す　第4巻 第1段



家来は左衛門に小栗の妻選びを依頼する　第3巻 第10段

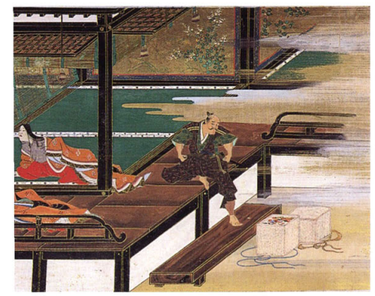
後藤左衛門が小栗の館を訪ねる　第3巻 第8段

照手は文を読み、自分宛の恋文と知る　第5巻 第2段

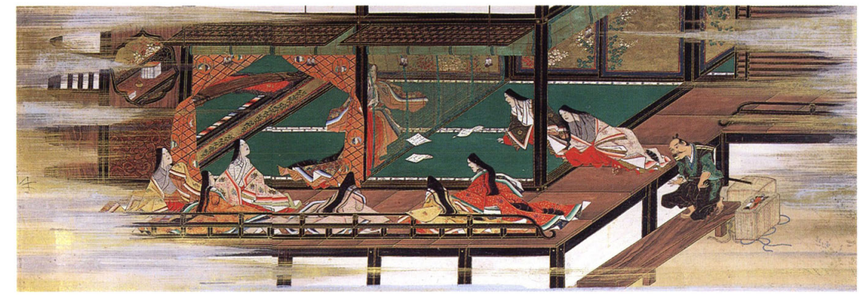
女房は照手に小栗の恋文を渡す　第4巻 第11段

左衛門は照手の館に赴き、小栗の恋文を差し出す　第4巻 第8段

小栗と家来は左衛門の案内で横山の館へ向かう　第5巻 第14段

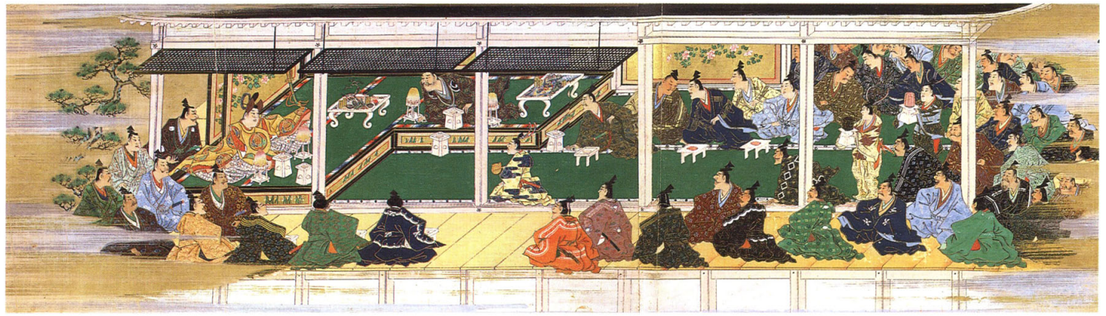


照手は小栗への返事を書く　第5巻 第7段



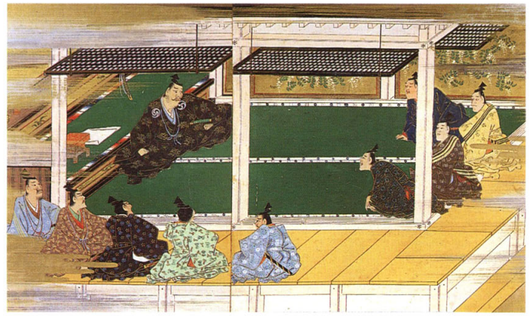
照手は父の怒りを恐れ、恋文を破り捨てる　第5巻 第3段

小栗は横山に許しなく婿入りし、照手と結ばれる　第5巻 第18段

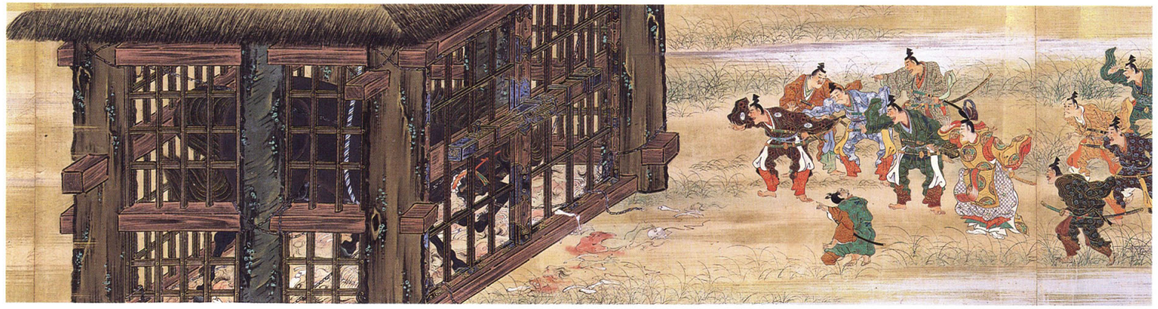


横山は小栗に鬼鹿毛への乗馬を所望する　第6巻 第7段

小栗は横山からの招きの使者を喜んで迎える　第6巻 第5段



横山一族は小栗を鬼鹿毛の犠牲にしようと談義する　第6巻 第3段



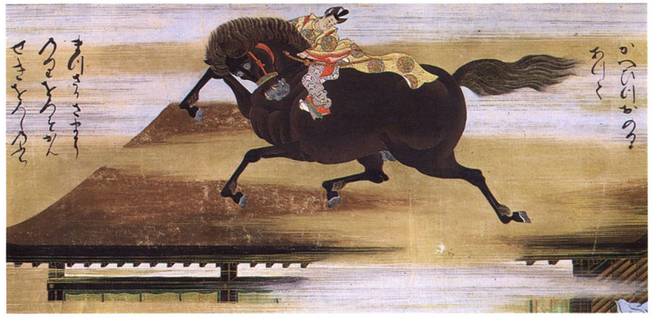
鬼鹿毛の厩周辺には、人骨などが散乱している　第6巻 第10段

小栗は鞍も着けず、繋いであった鎖を手綱にして乗馬する　第6巻 第18段

小栗が鬼鹿毛を乗りこなす様子を見て、横山の家来たちは驚く　第7巻 第3段

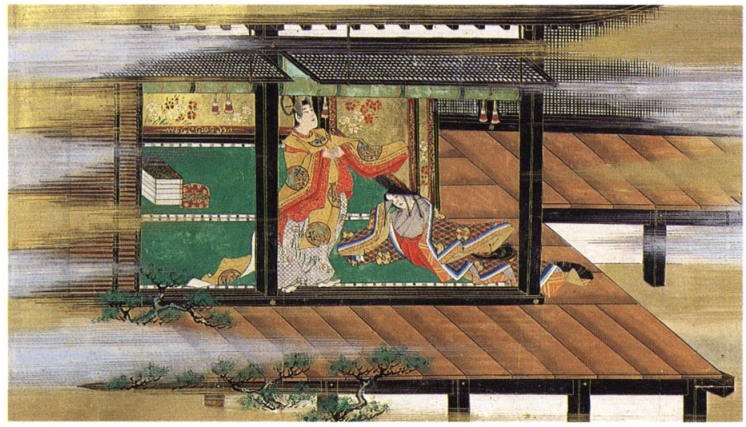
小栗は鬼鹿毛を碁盤の足の上に乗せる　第7巻 第9段

小栗は鬼鹿毛を松の木に乗り上げる　第7巻 第7段



小栗と鬼鹿毛は主殿の屋根を駆ける　第7巻 第5段

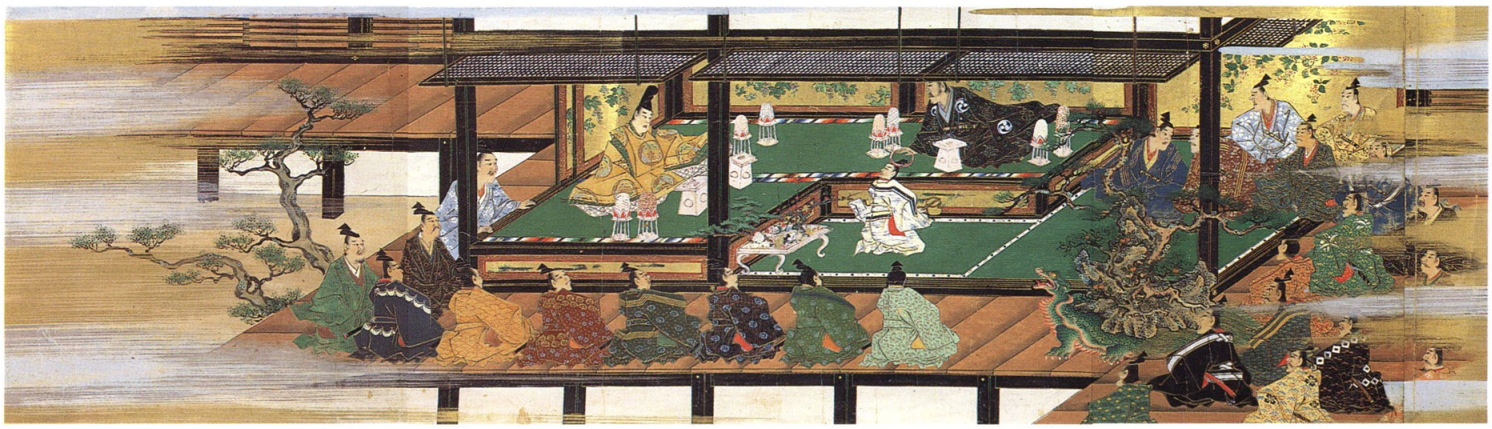
横山の酒宴に招かれた小栗に、照手は小栗一行が死装束で北に向かう不吉な夢を見た話をする　第8巻 第9段



小栗は夢違の呪文を唱える　第8巻 第10段

横山に飲酒の罪は自らが負うと言われ、小栗らは盃を取る　第8巻 第15段

横山は小栗を土葬に、家来を火葬にする　第8巻 第20段



小栗は横山の飲酒のすすめに、来宮信仰の日なのでと断る　第8巻 第12段

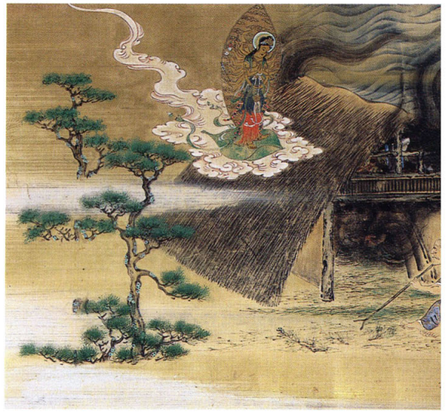
小栗らは毒酒によって次々に倒れ死ぬ　第8巻 第17段

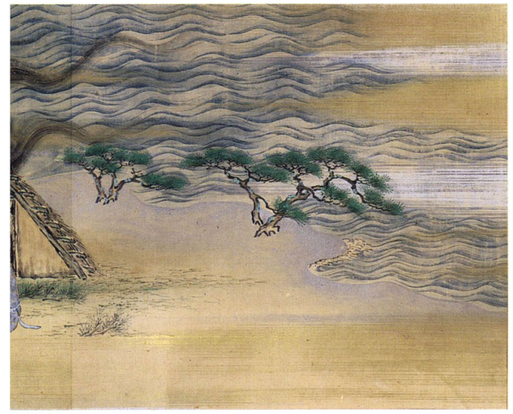
照手は自ら牢輿に乗り、相模川に向かう　第9巻 第1段

照手は小栗の死と自分の運命を知って悲嘆する　第8巻 第23段

照手らは相模川のおりからが淵に着く　第9巻 第2段

太夫の妻はなおも美しい照手に腹立ち、売り払ってしまう　第9巻 第14段

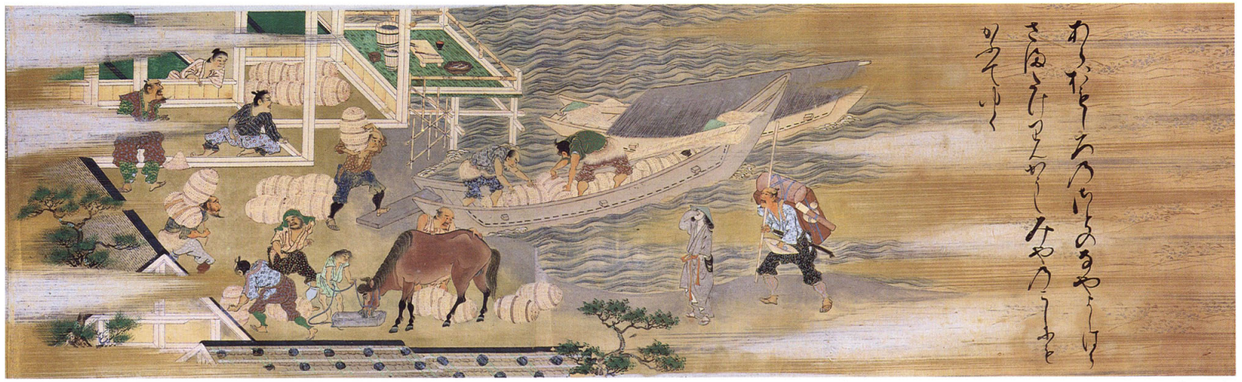




太夫の妻は照手を妬んで蚤に入れて燻すが、
照手は千手観音の加護を受ける　第9巻 第13段

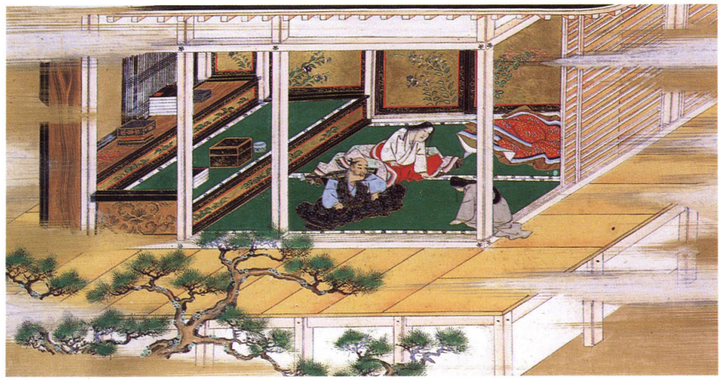
観音の加護でゆきとせが浦に漂着した照手を、太夫の長が引き取る　第9巻 第9段

もとをりこまつ



売られていく照手の行方—よしはら、さまたけ、りんかうし、宮の腰　第10巻 第1〜2段

照手は常に千手観音の加護を受ける　第10巻 第17段

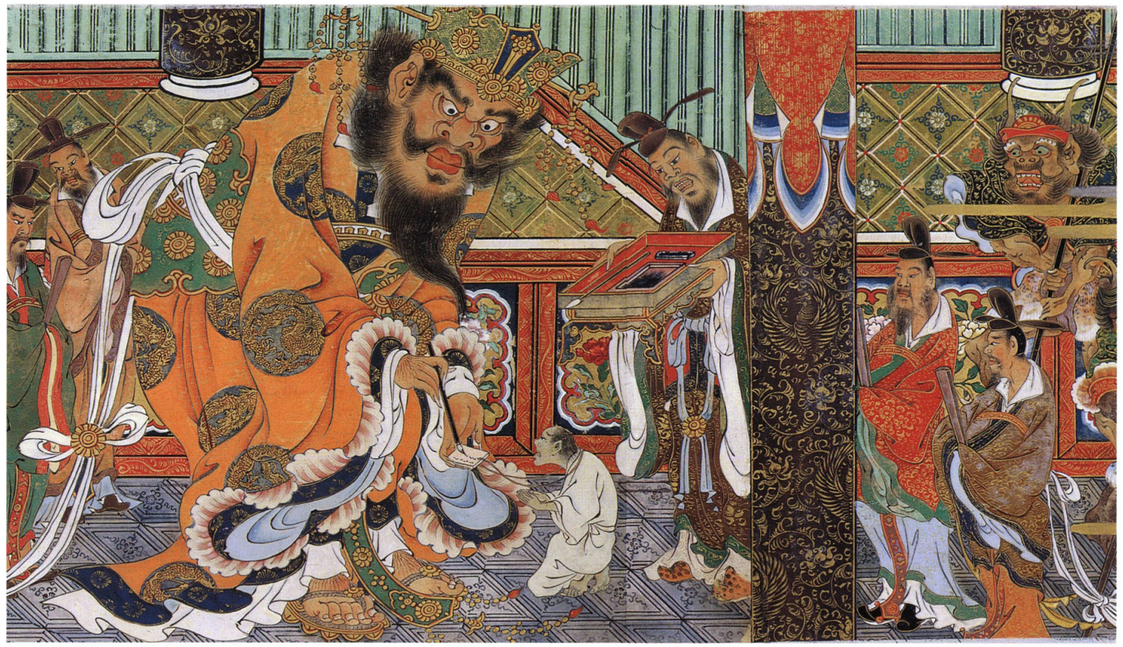


美濃国青墓の宿に売られた照手は、水仕と遊女のいずれの勤めかを選択させられる　第10巻 第11段

照手は常陸小萩と名付けられ、百人の遊女の世話を命ぜられる　第10巻 第16段

毒殺された小栗と家来は閻魔大王のもとへ送られる　第10巻 第19段

大王は小栗を娑婆に戻すため、杖で虚空を打つ　第11巻 第2段

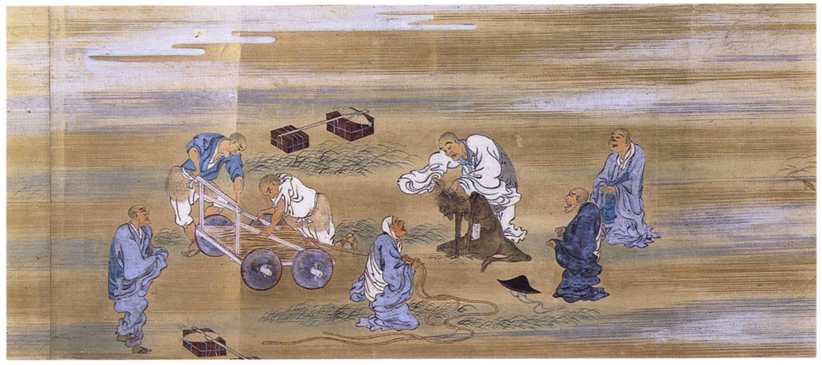


大王は、娑婆へ戻す小栗の胸札に藤沢の上人へのことづてを書く　第11巻 第1段

藤沢の上人は上野が原で餓鬼姿の小栗を見つける　第11巻 第4段

相模畷では、横山家中の侍も照手の供養にと車を引いた　第11巻 第7段

餓鬼阿弥の道中―吉原　第11巻 第18～19段



上人は小栗に餓鬼阿弥と名付け、この車を引けば供養ができると胸札に書き添える　第11巻 第5段

餓鬼阿弥の道中―湯本　第11巻 第12段

富士の裾野

駿河の府内

鞠子の宿　　浅間神社

餓鬼阿弥の道中―江尻の細道　第12巻 第3～6段

三河の八橋

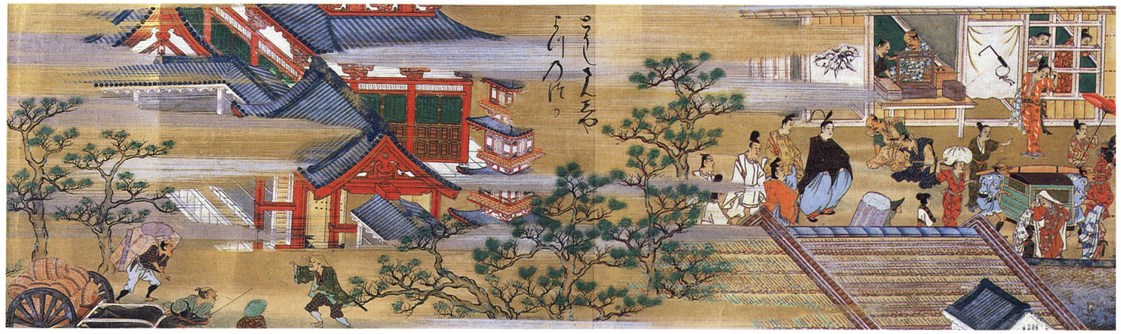
とうこの地蔵　　鳴海

餓鬼阿弥の道中―矢作の宿　第12巻 第24～27段

照手は狂女の姿に擬して車を引き、垂井の宿に着く　第12巻 第42段

餓鬼阿弥は美濃国青墓の宿で照手に見つけられ、照手は小栗の供養に車を引きたいと希望する　第12巻 第36段

餓鬼阿弥と照手の道中ー瀬田の唐橋　第13巻 第5段



東寺、さんしや、四つの塚

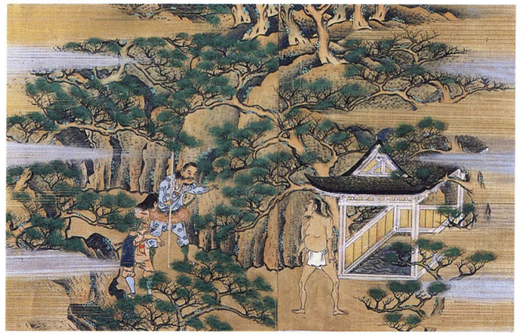
餓鬼阿弥の道中ー都　第13巻 第15～16段

照手は、本復の後は常陸小萩を訪ねるよう、胸札に書き添える　第13巻 第10段

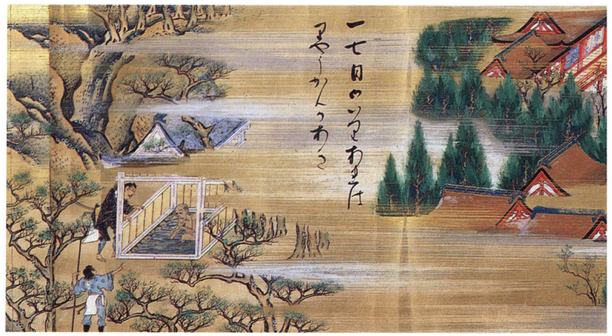
わたなべ、南部　　小松原

堺の浜

餓鬼阿弥の道中ー住吉四社　第13巻 第26～29段



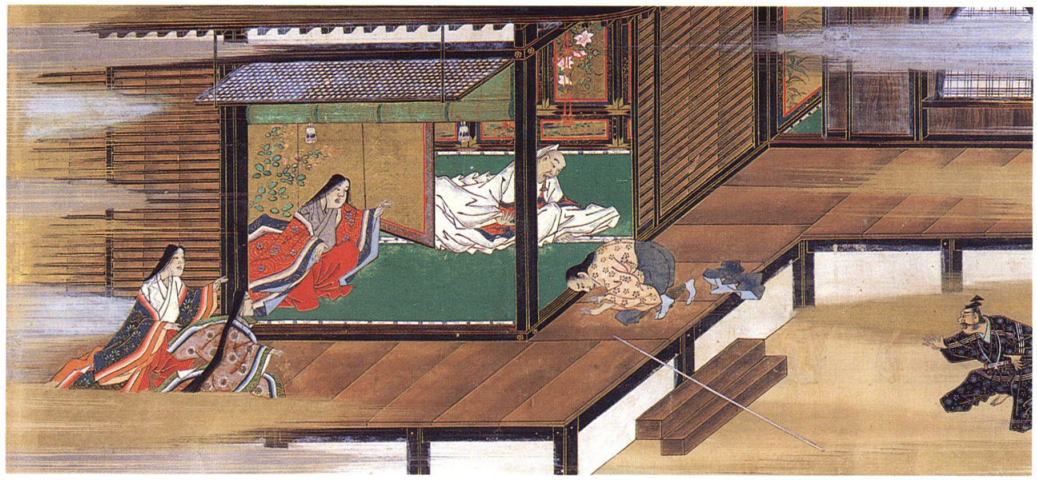
餓鬼阿弥は四十九日めにもとの小栗の姿に戻った　第13巻 第37段



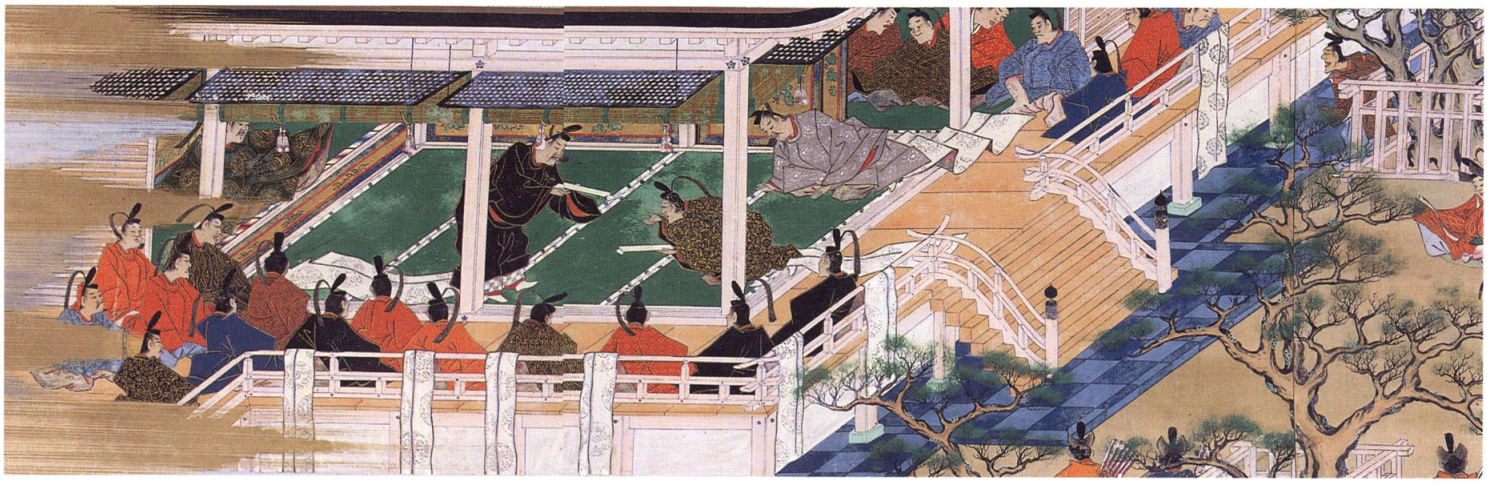
餓鬼阿弥は四百四十四日目に熊野本宮湯の峯に入り、
七日めには両眼が開いた　第13巻 第34～35段

餓鬼阿弥は大峯山中を行者に背負われて進む　第13巻 第33段

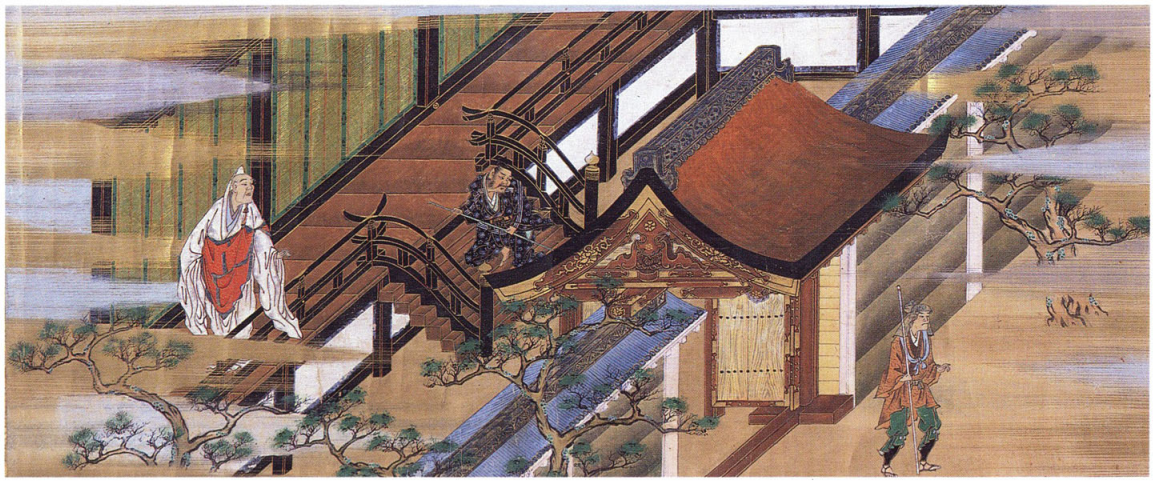
小栗は熊野三山で修行に入り、熊野権現に二本の金剛杖を貰う　第13巻 第38～39段



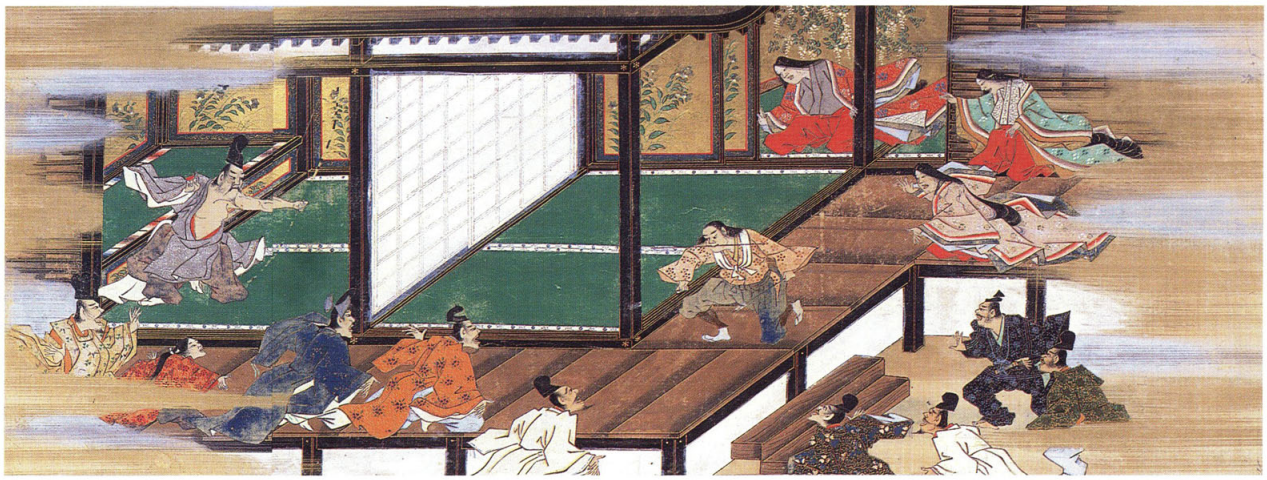
小栗は母に名乗り出て、三年間の勘当の許しを求める　第14巻 第3段



喜びの対面をした父子は帝の館へ参上し、小栗は五畿五国と美濃国を賜わる　第14巻 第8段



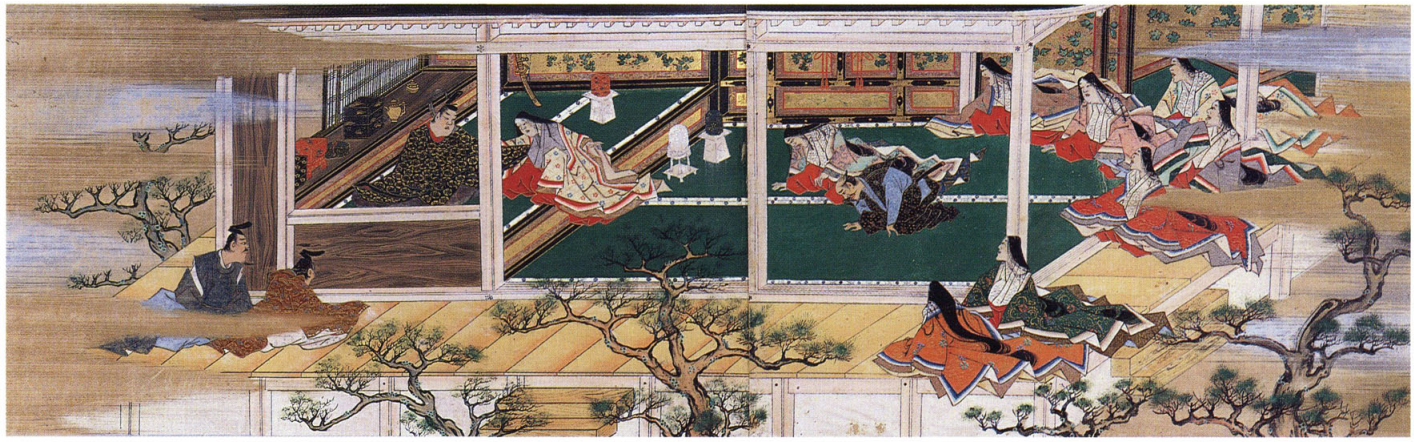
小栗は都へ戻り、兼家の館前で、伯父御坊が小栗を見かけて呼び返す　第13巻 第41段



兼家は小栗と確認するため、障子の向こうから矢を放つ　第14巻 第5段

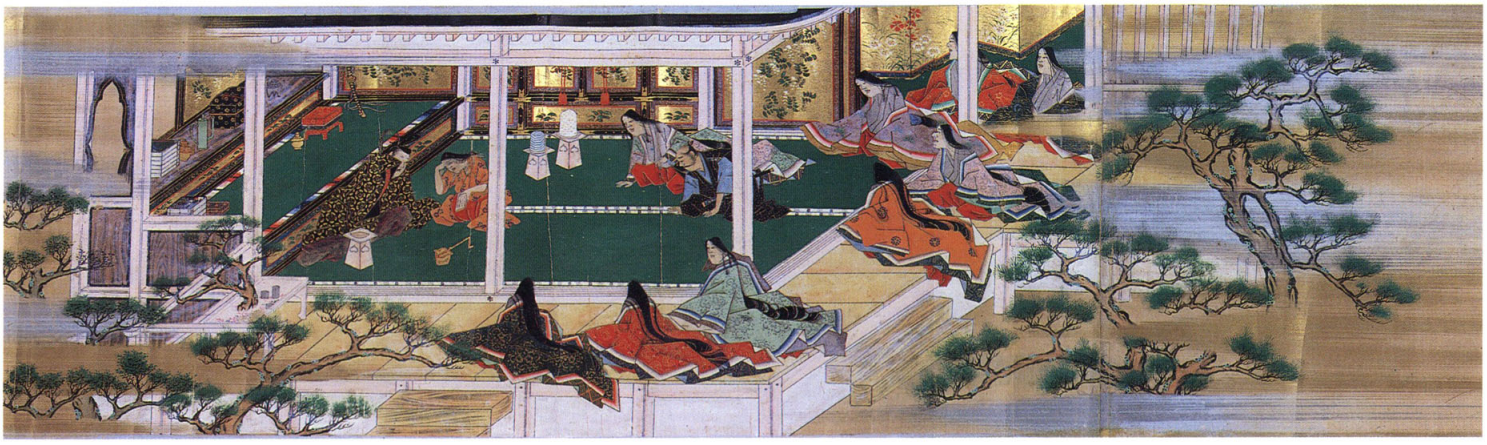
美濃国の君の長の館を訪れた小栗は、君の長夫婦に常陸小萩に酌に来させるよう命ずる　第14巻 第13段

照手は水仕の姿のままで酌に向かう　第14巻 第18段



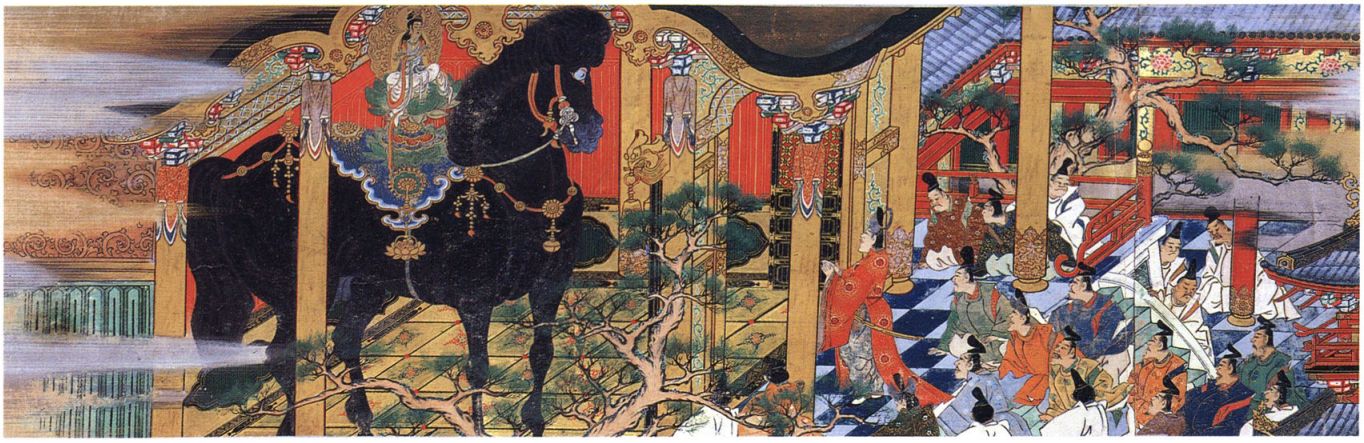
照手は小栗に、君の長を罰しないで、むしろ褒美をととりなす　第15巻 第1段

小栗は、照手が父への逆罪を嘆いたので、照手に免じて横山を許す　第15巻 第6段



小栗と照手は互いと分かって、逢えたうれしさのあまりに号泣する　第14巻 第20段

常陸に戻った小栗の攻撃に、横山は備えをする　第15巻 第5段



小栗は横山が送ってきた黄金で御堂と寺を建て、鬼鹿毛を馬頭観音として祀る　第15巻 第11段

小栗は横山の三郎を荒簀に巻いて西の海に沈める　第15巻 第13段

小栗は常陸国で富み栄え、八十三歳で大往生する　第15巻 第16段

小栗はゆきとせが浦の姥を鋸引きに処し、太夫には褒美を与える　第15巻 第14段

小栗は往生して、あらゆる神仏に供養される　第15巻 第17段

小栗は美濃国の垂井のおなこと社に神として祀られる　第15巻 第18段

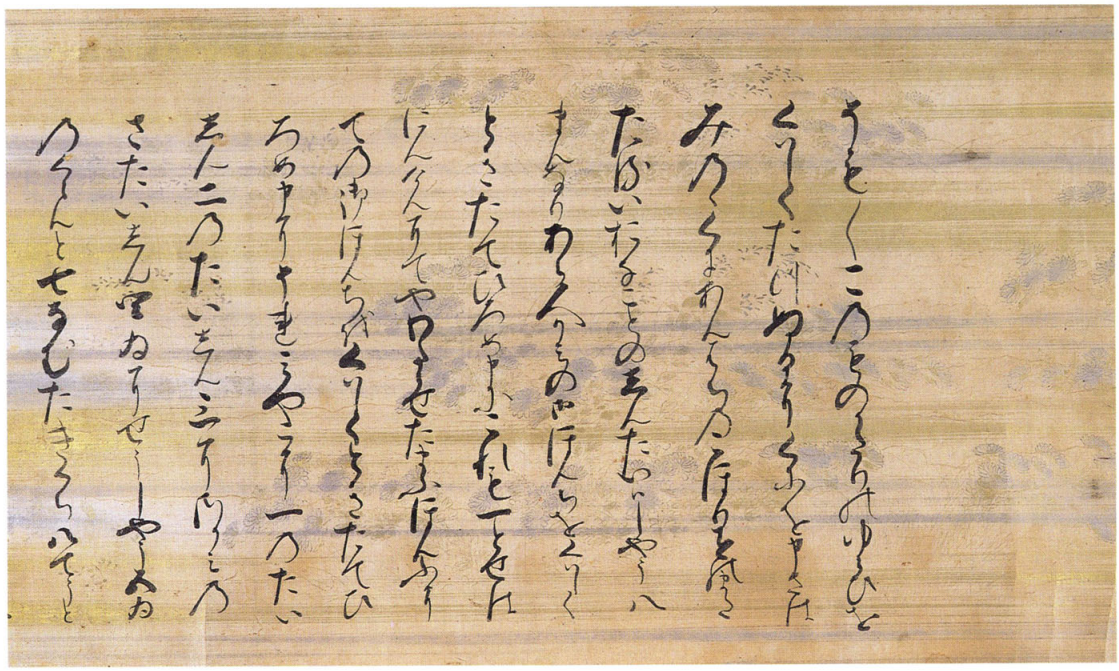
照手も近くに縁結びの神として祀られる　第15巻 第19段

第6巻 第6段 小栗

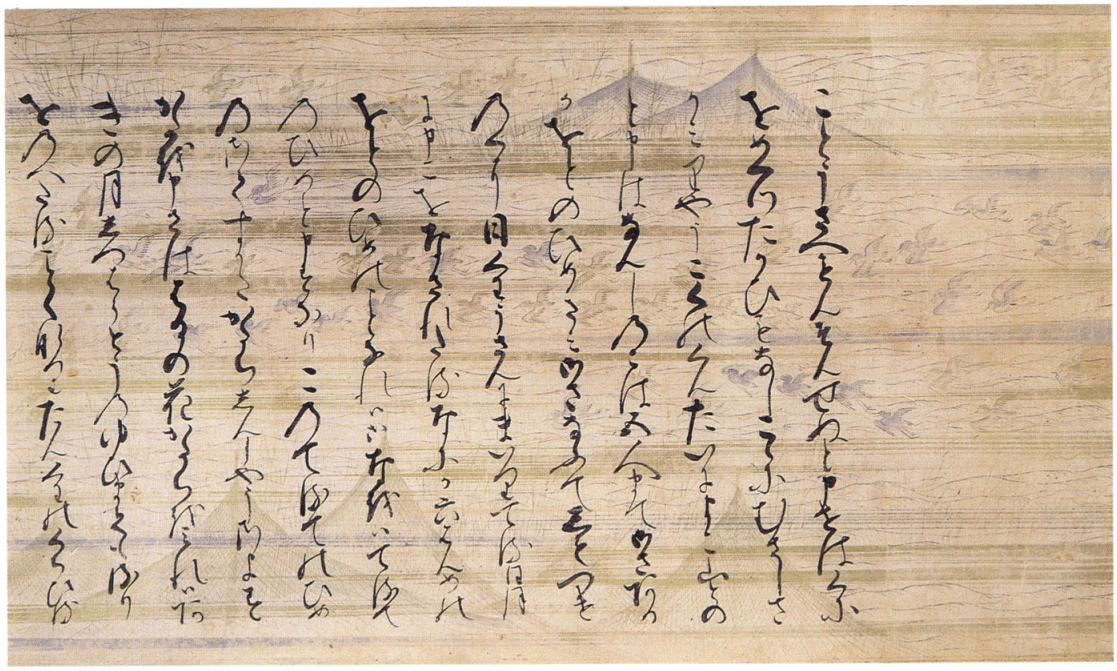
第7巻 第17段 照手

第7巻 第3段 横山の家来

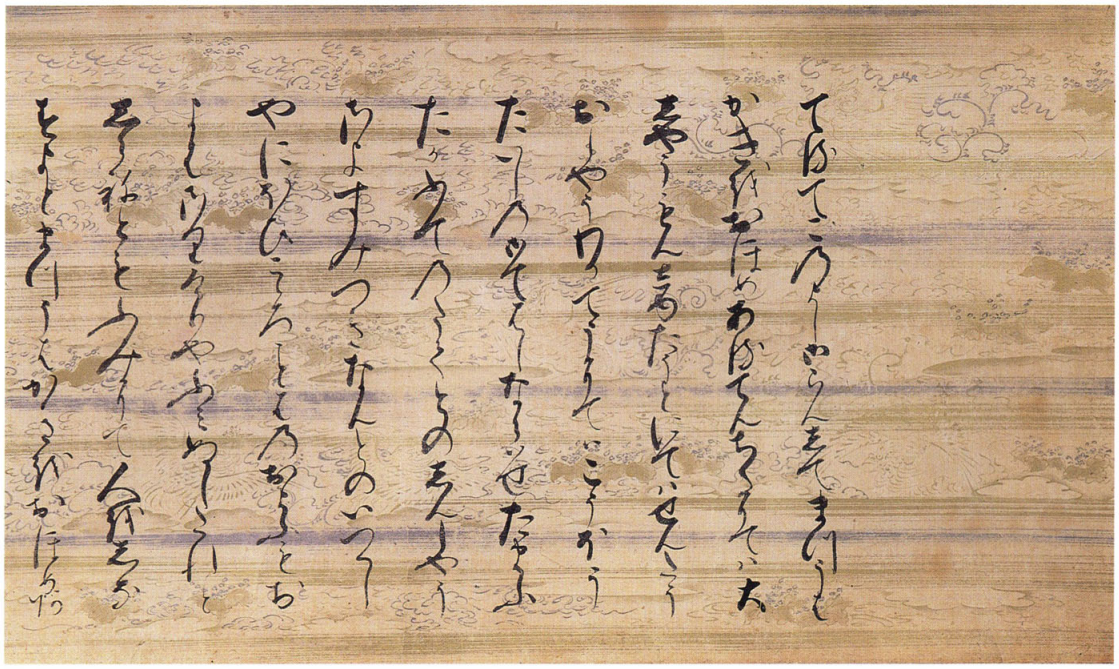
第10巻　第20段　閻魔大王



第1巻 第1段

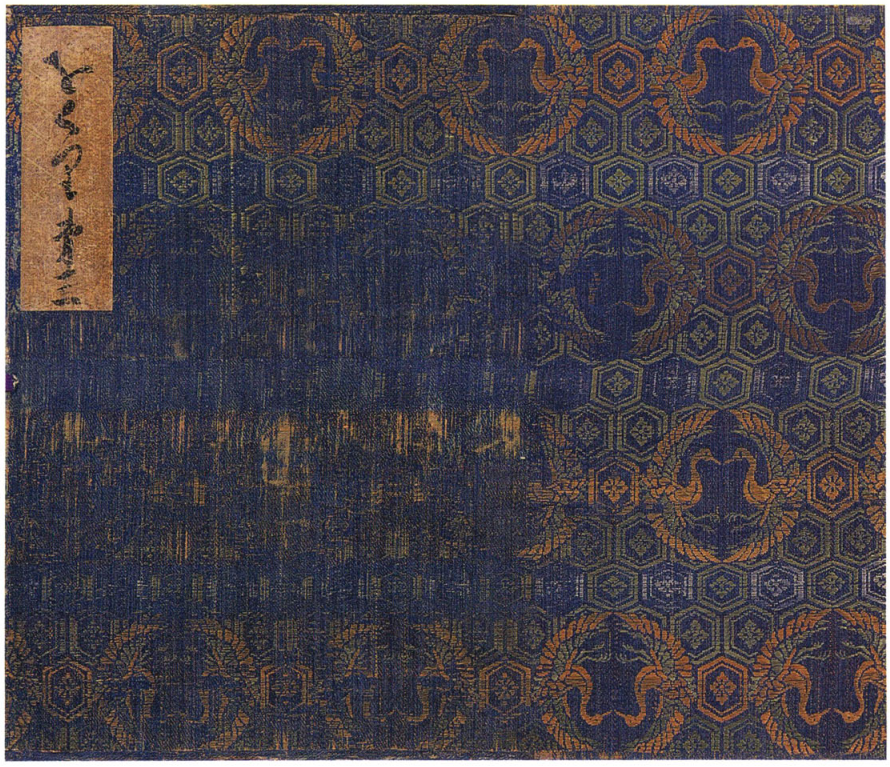


第4巻 第1段



第5巻 第1段

第11巻 第1段



表紙

巻姿

絵巻『をくり』――作品の概要と特徴など――

〔資料1〕各巻の内容

〔資料2〕各巻の法量

絵巻『をくり』――作品の概要と特徴など――

絵巻『をくり』の特徴を端的に言えば、極彩色の華麗な画面が、物語の内容にそって、ゆっくりと劇画的に展開するということになろう。それ故に、これだけの長大な絵巻となっているのである。全十五巻が揃い、ほぼ当初のままの姿で伝存するこの絵巻について、ここでは法量などの基礎的資料と、描写などの特徴を紹介し、他の又兵衛の作品、或いはいわゆる古浄瑠璃絵巻群の遺品との比較を通して、若干の考察を加えてみたいと思う。

一　基礎的資料

全十五巻に及ぶこの絵巻の各巻の仕様は次の通りである。

巻	段数	紙数	詞書行数	本紙長
第一巻	九段	一三紙	五八行	一二四六・九
第二巻	九段	一三紙	六一行	一二三八・八
第三巻	一〇段	一三紙	七九行	一二五〇・八
第四巻	一一段	一三紙	一〇六行	一二四九・一
第五巻	一八段	二六紙	一八三行	二四八八・六
第六巻	一八段	二六紙	二二一行	二四九八・〇
第七巻	一八段	二六紙	一四四行	二五〇九・四
第八巻	二三段	二六紙	二三七行	二四八〇・九
第九巻	二三段	二六紙	二〇八行	二四八六・一
第一〇巻	二三段	二六紙	一九四行	二四七五・七
第一一巻	二四段	二六紙	九五行	二四九三・七
第一二巻	四五段	二六紙	一九六行	二四八九・八
第一三巻	四一段	二六紙	一八一行	二四九七・五
第一四巻	二一段	二六紙	二一七行	二四九三・四
第一五巻	一九段	二六紙	一〇五行	二四九九・四
計	三一二段	三三八紙	二二八五行	三二三九八・一

〔装丁について〕

一紙は、縦三四・〇cm、幅は九五～九六cm台のものが中心で、全紙のうち二紙が八八・〇cmと八九・六cm(第一〇巻第二〇紙と同二一紙)で極端に短く、他は概ね九三～九七cmの範囲の法量である(資料2参照)。

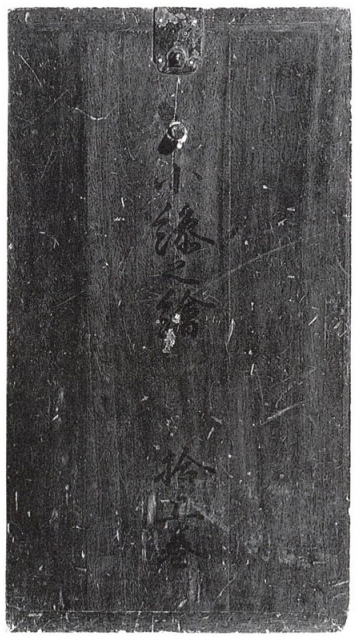
表紙裂は、地を濃縹の八枚朱子織とし、萌黄・白・紅・茶の緯色糸を浮かして、亀甲花菱文に向鶴文を表わす(図版58頁参照)。織密度は一㎠で経糸五五本前後、緯糸三五本前後である。上下は断ち切りで、五㎜程の幅で織方向が反対の同裂を付して糸のほつれを防いでいる。法量は、縦三三・三～三四・〇cm、幅三八・五～四〇・〇cm(八双を含む)である。

見返しには紗綾形文の型押の金紙が用いられ、この紙は巻末の軸巻紙にも用いられている。見返し幅は、三九・一～四一・六cmである。

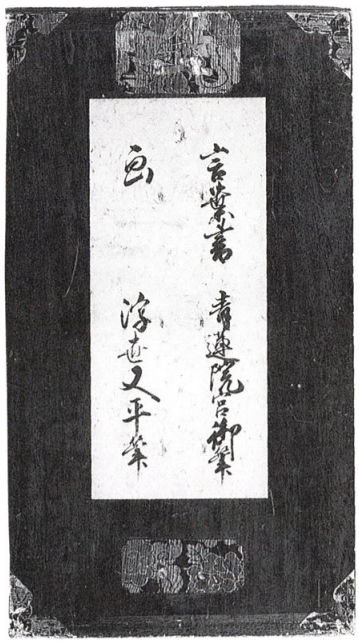
各巻とも、表紙左上に、概ね幅四・二×縦一二・六cmの題箋が付けられる。題箋の紙には金泥で三重襷文が表わされ、その上に「をく里　第〇」と墨書される(図版58頁参照)。巻紐は近代のもの。

軸は象牙、いずれも径二・四cm。軸巻部は、見返しに用いられたのと同様の金紙が幅二八・〇～三〇・〇cmで補足される。また、第一～四巻は、第五巻以降と巻いた太さをあわせるために芯を太くしてある。

収納箱は桐製。春慶塗の慳貪式の箱で、中は三巻ずつを納める引出し五段で構成されている。蓋表(挿図1)には「小繰之繪　拾五巻」と黒漆で書かれ、五段の各引出しにも一～一五の巻数がやはり黒漆にて記される。蓋裏(挿図2)には「言葉書　青蓮院宮御筆／画　浮世又平筆」と墨書された紙が貼付され、板の四隅と紙の上



挿図1：収納箱蓋表



挿図2：収納箱蓋裏

下には、下地に紙をおいて、その上に縹地に雲と牡丹かと思われる文様を表わした金襴を貼付している。蓋表などの漆書の文字と、蓋裏の墨書の文字は同一ではないと思われる。金襴は、蓋裏に引出しの把手が当たる箇所と蓋隅の損傷箇所に貼付されており、また墨書紙の下にも、把手の当る箇所に金襴が認められる。よって、漆書文字はおそらく箱制作当時、金襴はその少し後、墨書文字はさらにその後と考えられるが、大きく時は隔たっていないと考えられる。

〔伝来について〕

本絵巻は、明治二十八年(一八九五)四月に、岡山の池田長準より献上されたと記録される。池田長準(一八五三〜一九一三)は、岡山藩池田家の家老を務める家柄の人物らしく、岡山藩家老周匝池田(片桐)氏の祖・池田長政の系譜につながるとされるが、判然とはしない。明治三十三年に男爵となっている。

池田長準が、絵巻『をくり』を所蔵していたのが如何なる所以かも明らかにし難いが、長準の父・長常(無適齋か)が明治維新の折に藩主を補佐して功労があったと伝えられることから、この時に藩主より下賜された可能性もある。しかし、これは岡山池田藩に又兵衛の作品が多く伝えられていたことを考えての推論であり、現時点でこれ以上の言及は差し控える。

また箱内に、一通の覚書が納入されている。これは、絵巻のあらすじを書したもので、その冒頭に「明治二八年一月二日於御前拝観せしおくり絵巻物……」、文末に「敬三忘るす」とある。これは当時の皇后宮大夫であった香川敬三が記したものと思われ、四月に正式に献上される以前に、当時、日清戦争の中、広島大本営に御逗留の明治天皇をお慰めするため、この絵巻を御覧に入れていることが知られる。香川敬三が絵巻『をくり』の献上にあたって、力添えしていることは確かである。

二　詞書について

詞書は、箱蓋裏の墨書より、青蓮院宮の筆と伝承されている。又兵衛の生没年から考えると、この青蓮院宮は尊純法親王にあたる。

尊純法親王(一五九一〜一六五三)は、伏見宮貞敦親王の第四皇子として誕生、後に後陽成天皇の猶子、慶長三年(一五九八)に青蓮院に入って曼殊院良恕親王の付弟となり、大僧正や天台座主を務められている。いわゆる青蓮院流(御家流)系の能書として名高く、『東照宮縁起』(全五巻、重要文化財、日光東照宮)の詞書を書している。『東照宮縁起』は徳川家康の行状伝絵巻で、寛永十三〜十七年(一六三六〜四〇)、幕府の命によって、画を狩野探幽が担当して制作されたものである。

絵巻『をくり』の詞書が果たして尊純法親王の手によるかどうかは即断できず、今後さらなる検討を加える必要があるが、全巻を通して、ほぼ一人ではないかと思われる一様の書風を示している。これを尊純法親王が執筆した『東照宮縁起』中禅寺の段の詞書と比較すると、仮名書と漢字書の相違もあるため、類似点も認められるが、直ちに尊純法親王の文字とも決めがたい。

本絵巻の詞書は、仮名書が中心である。これは詞書に採用した「をくり」の原本が人形浄瑠璃の語りに用いられたものと考えられていることにも関連しよう。そして語り物の口調で書かれる文章は、大変に心地良いリズム感で物語を展開していく。餓鬼阿弥が東海道沿いに熊野へ向かって引かれ下って行く場面はおよそ八〇段にも及ぶが、音楽で言うなら曲の中の一小節で一呼吸おくように、「えいさらえいと引き過ぎて」、次々と場面を展開しているのである。説経節という語り物を題材に取り上げ、語り口調をそのまま生かして仮名書した物語の展開方法は、詞書から見ても絵巻の劇画的展開を助長して、大へん魅力的な絵巻を作り上げる大きな要因となっていよう。

三　詞書部分の下絵について

詞書部分には、第一一〜一三巻における餓鬼阿弥の道中、餓鬼阿弥と照手の道中の次々と各地の名所が展開されていく段以外は、ほぼ総てのおよそ二四〇個所において、金銀泥で下絵が施される。

その中で最も多いのは、全体の二割半を占める秋草に関連したものである。その中では野菊と薄が最も多く見られ、萩、女郎花、桔梗、リンドウ、かやつり草、さらに鈴虫などが描かれ、基本的にはこれらの中から数種を取り合わせて構成されている。

次に多いのは、松樹、若松である。さらに、藤花、菖蒲、蔦、葦、柳、小花、野草あるいは野に草を表現したものなど、植物に関連した図様が多く、松葉に小花、菊花流水、流水に浮草、蜘蛛の巣に小花、花唐草といったデザイン的な表現も見受けられる。また、桜に関しては桜樹と枝垂れ桜が一ヵ所ずつ、朝顔、麦、瓢箪、葡萄など、一ヵ所のみに取り上げられている図様もある。

景観的な図様も見られ、海浜を表現するものでは、網干や千鳥、舟の舳先などに、波、松や草などを表わす。また水辺の表現では、水鳥、水草、水波などで、貝や蟹を描くものがある。

さらに鳳凰、桐に鳳凰、梅に尾長鳥、野を駈ける兎といった、動物を図様とする個所がいくつかある。

下絵の種類と、それを描く個所については特に関連は認められないが、巻首の第一紙と、第五巻め以降の第一四紙では、全体から見ると、複合的な図様、あるいは

珍しい図様が取り上げられている。そこでこれに関連して、第五巻め以降の第一四紙の問題について触れておく。

この冒頭で紹介した各巻の仕様を見ていくと、第一～四巻までは全一三紙で本紙総長が約一二m五〇cm、第五～一五巻は全二六紙で約二五mと、それぞれでほぼ共通した仕様であることが判る。そして第五～一五巻においては、第一三紙で一段の絵がきっちりと終り、第一四紙では詞書の行数からみれば幅が広く取られて下絵も入念に描かれ、各巻途中の各段との扱いとは明らかに異なる。むしろ各巻巻首と共通した仕様と見るべきであろう。従って、第五～一五巻は第一三紙と第一四紙の間でほぼ二等分できるのである。とすると、当初は一巻が全一三紙で、本紙総長が約一二m五〇cmのほぼ共通した法量で、二六巻に仕立てられる予定であったことも考えられる。

そして、第一三紙と一四紙を前後の境として考えた場合、前半の第一二～一三紙にかけて縦折れが認められるのに対し、後半の第一四～一五紙では縦折れが見られない巻が数巻(例えば第九巻)あり、過去に第一三紙が巻末として巻かれていた時期があったことを想像させる。しかし、表紙裂や題箋は確かに当初のものと考えて良く、また収納箱についても江戸時代中期以降のものとは考えられない。従って、この点については、制作当時には二六巻仕立てとして計画されながら、数年にわたる制作の途中で現在の一五巻仕立てに変更されたと考えるべきであろう。

四　画面の描写について

全三一二段にも及ぶこの絵巻の画面描写は、実に多様な要素が含まれている。もちろん、描写素材の取り上げ方、描写の手法などの画の在り方において、岩佐又兵衛という画家自身、又兵衛の工房の画家たちについて考察することが中心になるが、歴史的には建築や風俗などの点からも興味深い史料となろう。今後、これらについても詳細に紹介していきたいとは考えているが、ここでは、今回の展示にあたって行った調査で気付いた点を中心に、画面における特徴などを紹介する。

まずこの絵巻を描いた画師に関連して、他の古浄瑠璃絵巻群の絵巻においても指摘されているように、絵巻『をくり』もおそらくは又兵衛の工房において、複数の手によって描かれたことは確実である。実際、これだけ多くの場面があると、描写の上手、下手はかなり顕著に表われ、指導的立場の者と助手の存在は、容易に想像できる。

全体を通してみると、第一～二巻は全段通して比較的上手いが、両巻での描写の雰囲気は一様ではない。第三巻に入るとそれまでの描写の雰囲気が変化しており、特に第七段以降、第五巻第一三段までの、執拗に展開する小栗と照手の遣り取りの場面では、一段ごとにかなり描写に差がある。このことは、以後の物語の内容が執拗に展開する場面でも同様のことが言える。

第九～一三巻は、照手が売られ行く場面、小栗が餓鬼阿弥となって東海道を下っていく場面、照手と餓鬼阿弥が大津まで下っていく場面、そして餓鬼阿弥が京、大坂を経て、いよいよ熊野へ向かう場面と、各地の名所を中心にして景観的な場面が主となるせいか、画面の色彩もしっとりと落ち着いた雰囲気で展開されていく。叙情性が強調される場面が多いのである。これらも筆は一様ではないが、段落の主要場面では、優れた描写が多い。

第一四～一五巻は、物語の展開からも、執拗な場面は小栗と照手が再会するまでで、後はむしろ駈け足に話が進んでいく。場面ごとに画師が異なるであろうことは、ここでも同じである。しかし、絵の場面が比較的長く、長い画面をこなせるだけの技量を持つ画師が担当したと見られ、上手い個所が多く、描写の相違は比較的少ない。ある程度の技量を持つ画師ばかりが数人で担当した可能性もある。

この様に全体を見ると、物語の粗筋によって大体分けられる大まかな段落――例えば、小栗と照手の遣り取りの、小栗の館での場面と照手の館での場面。小栗が横山の館に招かれる前後の場面。鬼鹿毛を乗りこなす場面、照手が売られ行く場面、閻魔大王の場面、小栗が餓鬼阿弥となって東海道を下って行く場面など――には描写の雰囲気に共通性がある。これらから、この絵巻は、物語の展開をその粗筋によって大まかに分割した上で、幾つかのグループが、割り当てられた大きな段落を、一人の画師が主体となって何人かの画師を指導しながら描いていった、分業的な制作方法が推察されるのである。

果たしてこの中に岩佐又兵衛自身が描いた部分があるのかどうかは、明らかにはし難い。しかし、いわゆる又兵衛風といわれる特色である豊頬長頤の顔、手足の指の跳ね上がりや衣裾の翻りは全体に見られ、やまと絵の技法、水墨画の技法と和漢の技法や題材が混入し、また子供が小さく描かれるなどの特徴も含まれている。そこで、この絵巻の中でも、とりわけ描写が優れている場面、注目される場面を幾つか紹介しながら、この問題を考察してみる。

第一巻(図版10～13頁参照)は、全段を通して優れた描写を示す。全体に画面の構図には破綻がなく、色彩鮮やかに、隅々まで細緻を極めて描かれている。多くの公卿や女房たちの中には、又兵衛の作品にみられるそれらの表情に近いものも少なくない。例えばここでの主人公・二条兼家の顔は、『鹿と貴人図』(MOA美術館)の貴人、あるいは『三十六歌仙画冊(小林家本)』(福井県立美術館)の中納言敦忠に似ている。また兼家の御台は、やはり『三十六歌仙画冊(小林家本)』の女御に表情が近い。これに関連して、すでに辻惟雄氏が、絵巻『山中常盤』(MOA美術館)に描

かれた人物の表情と『三十六歌仙画冊(小林家本)』の人物の表情の近似を指摘しておられ、このことは絵巻『をくり』の位置を考える上で重要な手がかりを与えてくれる。第一巻は、第一段、第三段、第五～六段を中心として、人物の表情や動きが、しなやかな筆使いでありながら躍動感に満ちて、その情景の雰囲気を見事に描写している。前述したような、段ごとの描き手の違いもなく、おそらくこの巻だけは一人の優れた画師によって制作されたと考えて良いかと思われる。

第二巻では、巻末の深泥池の大蛇が圧巻である(図版14～15頁参照)。大蛇というよりは龍といった方が適切で、これは物語の誇張的表現によるのであろう。その表情は、同じ古浄瑠璃絵巻群の作品『上瑠璃』第九巻や、伝又兵衛作『蟻通図・貨狄造船図屏風』(出光美術館)の龍などよりは、『金谷屏風』の両脇に配されていた墨画の「雲龍図」「虎図」(東京国立博物館)に、描写の迫力は近い。

次に挙げるのは、第六巻第六段(図版52頁参照)である。小栗が横山の屋敷に出かけて行く場面で、幔幕を引き上げて、家来共々いざ乗り込まんとする様子を描く。この絵巻の主人公・小栗は、おそらくこの場面の小栗がこの絵巻の中では最も美しい。又兵衛の描く貴人姿の人物が、『本性房振力図』(東京国立博物館)の本性房のように衣裾を翻して、歌舞伎役者のような立ち振る舞いに似た誇張した表現で登場するのが、この場面とも言えよう。

第七巻第三段(図版22～23・54頁参照)は、絵巻が右から左へ少しずつ開けられていく時、段の冒頭に群集する侍たちが、ありとあらゆる表情で巻物の左を向いており、見る者をわくわくさせて引き付ける。絵巻という巻物の特徴を大変良く理解した上で画面が構成されているという点で、この絵巻の優秀さを示唆していよう。もちろん、描かれた侍たちの描写は実に上手く、又兵衛風の特徴が多く表われている。

これと近い理由で、第八巻第九段(図版24～25頁参照)が挙げられる。照手のみた不吉な夢の場面であるが、霞の中に眠い目をこすって立つ照手が描かれ、大勢の僧侶に送られる小栗が死装束で北へ向かう。前述と同様の画面構成の効果が優れている。また小さく描かれる照手の立ち姿は、又兵衛作の『官女図』(MOA美術館)に近いことや、僧侶や小栗らの表情なども又兵衛の作品に近い点が指摘できる。

柔らかな描線を生かして、穏やかでしっとりとした表情を画面一杯に表わすことで、叙情性豊かな見事な場面を作り上げているのは第一〇巻第一七段(図版31頁参照)である。水墨画的な手法を主体としたこの場面の雰囲気は、『樽屋屏風』の「伊勢物語図」(出光美術館)に通じ、かなり熟練した画師によると見てよい。

主に第一〇～一二巻に描かれる、売られ行く照手の道行き、東海道を引かれ下って行く餓鬼阿弥の道中、餓鬼阿弥と照手の道中、再び餓鬼阿弥の道中と、この絵巻においてかなりの段数を占めるこれらの描写は、描き手の違いは認められるが、『山中常盤』第二～三巻、そして『堀江物語(四巻残欠本)』(香雪美術館ほか分蔵)に見られるこれらに類似する場面の描写と近く、一部を除いては人物の大きさが平均して柔らかな姿に描かれる点においては『堀江物語(四巻残欠本)』により近いとも考えられる(図版34～41頁参照)。

また、描写表現がおもしろく、迫力もあり、色彩豊かに描かれて見応えある場面となっているのが第一〇巻第一九段～第一一巻第二段の小栗が閻魔大王に裁かれる場面であるが、この中では最初の第一〇巻第一九段(図版P32～33参照)の描写が最も優れている。二紙をまるまる絵にあてて一八五cmに及ぶ一場面を作り上げている。閻魔大王をはじめ、その家来らのグロテスクな表情は、この第一九段が表情の変化や迫力に最も富んだ描写となっており、宮殿の様子なども含めて、この段落の以後の図様の手本となっていると考えられる。このことは、他にも同様のことが言える場面――例えば、小栗が鬼鹿毛を乗りこなす場面では、第七巻第三段が二紙にわたって優れた描写で描かれる――があり、この点からも制作過程における分業性が考えられる。

比較的筆の上手い画面が続く第一四～一五巻の中では、まず第一五巻第一六段(図版46～47頁参照)の小栗の往生場面がおもしろい。小栗の死を悲しむ人々が、オーバーな程にリアル感を伴って描かれている。これまでに見てきた画面から、ここは急に人物がやや大振りになるのも印象的である。

そして最後の見せ場、第一五巻第一七段(図版48～49頁参照)の小栗の極楽往生の場面。仏教の本来の教義、尊像の姿といったものから逸脱した、奇抜な表現である。一つ一つの尊像が独創的な表現で描かれてそれだけでも十分に絵になり、一つの画面として捉えても、実に自由奔放な独創的な空間である。画師として、相当な人物の手になると考えざるをえない。

以上、この絵巻において、描写が優れていると思われる場面の中から、主だった場面を取り上げてみた。言うまでもなく、この絵巻の描写についての分析は、さらに詳細に行っていく必要はある。しかしこのような考察をとおして、この絵巻の特徴をおおよそ次のようにまとめることが出来よう。

五　絵巻『をくり』の特徴と制作者、制作年代について

①基本的に一巻は一三紙、本紙総長約一二m五〇cmで計画され、第五巻め以降も同様に、当初は二六巻で計画された。

②詞書は、浄瑠璃の正本(テキスト)をそのまま用いたようで、独特のリズム感のある語り調子で展開され、仮名書を主体としている。

③物語は小栗と照手の恋愛譚が中心で、その部分では内容が執拗に繰り返され、

場面展開がゆったりしている。

④詞書部分には、基本的に金銀泥で様々な下絵を施す。

⑤描写には、水墨画、やまと絵といった和漢いずれの手法も見られ、多色の絵具、さらに金箔、金泥、銀泥を用いて、華麗な場面、叙情性に溢れる場面など、物語の内容に応じた画面を作り上げている。

⑥絵巻は、おそらく、まず絵の部分が先に仕上がり、詞書部分の下絵や霞を調えて、一巻分出来上がったものを数巻分まとめて詞書を書いてもらい、一巻に仕立てている。

⑦描写部分は、物語の展開の粗筋に従って大きな段落に分け、一つの段落は担当の画師が示した図様を基本に、何人かの助手的な画師が描いている。しかし主要な場面は、かなり優れた画師の存在が想像できるが、それも複数である。

⑧描写は、上手下手はともかく、総じていわゆる又兵衛風である。又兵衛自身の作品と比較すると、優れた描写の中にはそれらと近似するものが少なくない。

⑨古浄瑠璃絵巻群の中でも、とりわけ『山中常盤』『堀江物語(残欠本)』の描写との類似が指摘でき、いずれの特徴とも複合するものがある。

では、絵巻『をくり』の制作年代を何時頃と考えて良いであろうか。古浄瑠璃絵巻群に含まれる絵巻の制作年代については、すでに辻惟雄氏の研究があり、絵巻『をくり』の制作について多くの示唆を与えてくれる。古浄瑠璃絵巻群の中で最も制作時期が早く、優れた絵巻とされる『山中常盤』は、『三十六歌仙画冊(小林家本)』や『金谷屏風』の手法や表現に近いとされ、その制作年代は元和末から寛永初年にかけての頃とされる。一方、『堀江物語(残欠本)』は又兵衛の画では『樽屋屏風』や『故事人物図巻』に最も近く、寛永中頃と考えられている。そして『をくり』は、『堀江物語(残欠本)』より後と考えられているが、ここで考察してきたように、描写や手法において『山中常盤』『堀江物語(残欠本)』のいずれの特徴をも持ち合わせる本絵巻は、又兵衛の画と比較しても、二者の間に位置づけて考えるべきかと思う。制作年代を寛永年間におくことは、詞書が寛永かそれに近い頃の正本から得ているだろうという、国文学の立場での見解とも一致する。そして、辻氏が『山中常盤』には、又兵衛自身の筆があると確信しておられるように、『をくり』はその優れた描写の中に又兵衛自身の筆が存在し、彼自身の監督下の工房で制作されたと考えなければ、この時期に絵巻としてこれだけ優秀で長大な絵巻は誕生しないであろう。

繰り返すようであるが、今後、本絵巻の描写については、又兵衛の他の作品と比較しながら、もっと詳細に分析していく必要がある。特に絵巻『山中常盤』『堀江物語(残欠本)』との比較は重要であろう。

今回、初めて絵巻『をくり』をかなり詳細に紹介することが出来たが、これを機会に、この絵巻が絵画史をはじめとするそれぞれの分野の研究にとって良き資料となり、多くの方々からの御教示を戴き、また、いずれこの絵巻の全ての場面を紹介出来る機会に恵まれることを切望する。

松本　彩(まつもとあや／当館学芸室研究員)

〔資料1〕各巻の内容

段	内容
《第1巻》	
第1段	発端、美濃国安八郡の墨俣、垂井のおなことの神体・正八幡の荒人神として祀られている人物についての物語
第2段	京の公卿・二条家の兼家、後継ぎのないことを悩む
第3段	兼家の御台(妻)、鞍馬寺の毘沙門天に参詣し、夢告を得る
第4段	兼家ら、懐妊の吉報を待ち望む
第5段	若君、誕生する
第6段	若君に産湯をとらせ、射払いをする
第7段	若君、有若と命名される
第8段	有若、成長して早七歳になる
第9段	有若、学問習得のため、東山へ行く
《第2巻》	
第1段	有若、よく学問に励み、十八歳になる
第2段	有若、位を授けられる
第3段	有若、石清水八幡の神前で常陸小栗と命名される
第4段	小栗の妻選び
第5段	小栗の妻選び
第6段	小栗の妻選び、三年の間に七十二人の御台を迎えるが気に入らない
第7段	小栗、御台を決めるため、鞍馬寺への参詣を思い立つ
第8段	小栗、深泥池の畔で横笛を奏でる
第9段	深泥池の大蛇、小栗を見初める
《第3巻》	
第1段	大蛇、美女に変化し、小栗を誘う
第2段	小栗と大蛇の契り、世間の噂となる
第3段	兼家、小栗の処分を考慮する
第4段	小栗、常陸へ流される
第5段	常陸の侍、小栗にかしずく
第6段	小栗、常陸国の判官となる
第7段	商人・後藤左衛門、小栗の館を訪問する
第8段	左衛門、薬を売りながら諸国を巡っていると話す
第9段	左衛門、小栗に名を聞かれる
第10段	小栗の家来、左衛門に小栗の妻選びを依頼する
《第4巻》	
第1段	左衛門、小栗に相模・武蔵両国の郡代である横山殿の一人娘で、日光山参詣の申し子である照手姫のことを話す
第2段	小栗、まだ見ぬ照手にこがれ、左衛門に仲人を依頼する
第3段	小栗、照手への恋文を書く
第4段	小栗、左衛門に恋文を託す
第5段	左衛門、照手の館へ向かう
第6段	左衛門、照手の館に到着する
第7段	照手の館の女房たちが、左衛門のもとに集まる
第8段	左衛門、小栗の恋文を披露する
第9段	女房たち、恋文を見て笑う
第10段	照手、女房たちの笑い声を聞いて現われる
第11段	女房、照手に小栗の恋文を渡す
《第5巻》	
第1段	照手、文の上書きを誉める
第2段	照手、文を読み、自分宛の恋文と知る
第3段	照手、小栗の恋文を破り捨てる
第4段	女房たち、左衛門を非難する
第5段	左衛門、女房たちに反論する
第6段	照手、後悔する
第7段	照手、返事をしたためる
第8段	女房、照手の返書を左衛門に渡す
第9段	左衛門、小栗のもとへ戻る
第10段	左衛門、照手の文を小栗に渡す
第11段	小栗、婿入りを決める

第12段　小栗、従者として強者の家来十人を選ぶ
第13段　小栗、左衛門に道案内を命ずる
第14段　左衛門の道案内で、小栗ら出発する
第15段　左衛門、横山の屋敷を説明する
第16段　小栗、左衛門に砂金などの褒美を与える
第17段　小栗、照手の住まいに向かう
第18段　小栗と照手は結ばれる

《第6巻》

第1段　照手の父・横山、五人の息子たちに小栗のことを尋ねる
第2段　長男のいえつぐ、横山の腹立ちをいさめる
第3段　三男の三郎、小栗を人喰馬の鬼鹿毛に乗馬させる企てを提案する
第4段　横山、照手の住まいに使者を送る
第5段　小栗、使者を喜んで迎える
第6段　小栗、家来十人を連れて出かける
第7段　横山、小栗に持ち馬への乗馬を所望する
第8段　小栗、厩に向かう
第9段　小栗、鬼鹿毛を見て、横山の企てを知る
第10段　鬼鹿毛の厩の様子、人骨などが散乱する
第11段　小栗、馬に殺されるわけにはいかないと考える
第12段　家来、小栗に鬼鹿毛への乗馬を勧める
第13段　小栗、家来を厩の外へ出す
第14段　小栗、鬼鹿毛に死して後は馬頭観音として祀ろうと言い含める
第15段　小栗、厩を開けるよう厩の別当に命ずるが、別当は鍵を預っていない
第16段　小栗、自らの力で厩を開ける
第17段　小栗、鬼鹿毛に鞍を着けないで乗馬する
第18段　小栗、繋いであった鎖を解く

《第7巻》

第1段　小栗、鎖を手綱にして引っ立て、鬼鹿毛の素晴らしさを誉める
第2段　小栗、鬼鹿毛を歩ませる
第3段　横山の家来、小栗が鬼鹿毛を乗りこなす様子を見て驚く
第4段　小栗、鬼鹿毛を乗りこなし、主殿の屋根にかけられた梯子を登り上がる
第5段　小栗と鬼鹿毛、主殿の屋根を駆ける
第6段　小栗と鬼鹿毛、主殿の屋根から梯子づたいに降りる
第7段　小栗、鬼鹿毛を松の木に乗り上げる
第8段　小栗、鬼鹿毛で、障子の上を見事に乗り越える
第9段　小栗、鬼鹿毛を碁盤の足の上に乗せる
第10段　小栗、鬼鹿毛を見事な手綱さばき、鞭さばきで乗りこなして見せる
第11段　鬼鹿毛、小栗に降参する
第12段　小栗、鬼鹿毛を桜の古木に繋ぐ
第13段　小栗、横山の館の座敷に戻る
第14段　鬼鹿毛、古木を引き抜いて駆け出す
第15段　小栗、呪文を唱えると、鬼鹿毛は跪く
第16段　小栗、鬼鹿毛を厩に戻す
第17段　小栗、照手の住まいに戻る
第18段　横山、三郎の提案で、小栗の毒殺を企てる

《第8巻》

第1段　横山、照手の住まいに使者を送る
第2段　小栗、返事を出さず
第3段　横山、六度に及ぶ使者を送る
第4段　三郎が使者として訪ね、小栗、承知する
第5段　照手、小栗を引き止めようとして、不吉な夢を話す
第6段　照手の夢、大鷲が伝来の古鏡を砕く
第7段　照手の夢、小栗所持の短刀が折れる
第8段　照手の夢、鷲が折った小栗の弓が卒塔婆になる
第9段　照手の夢、小栗一行が死装束で北に向かう
第10段　小栗、夢違の呪文を詠じる
第11段　小栗ら、衣装を調えて、横山の屋敷に出かける
第12段　小栗、来宮信仰の日で断酒すると、飲酒を断る
第13段　横山、策を考える
第14段　横山、飲酒の罪は自らが負う、と小栗の前で舞を舞う
第15段　小栗ら、盃を取るが、横山は毒酒を混ぜる

第16段　小栗ら、毒酒をもられる
第17段　小栗ら、次々に倒れる
第18段　小栗、二十一歳にて死す
第19段　横山、占いにより、小栗は土葬に、家来を火葬にすることを決める
第20段　横山、急ぎ小栗らの葬儀を行う
第21段　横山、照手を相模川のおりからが淵に沈めるよう、鬼王・鬼次の兄弟に命ずる
第22段　照手、小栗の死を知り、号泣する
第23段　照手、兄弟に形見を取らせて、供養を頼む

《第9巻》

第1段　照手、自ら牢輿に乗る
第2段　相模川のおりからが淵に着く
第3段　兄弟、照手を助ける決意をする
第4段　兄弟、沈め石を切り離して牢輿を流す
第5段　照手、観音の加護でゆきとせが浦に漂着する
第6段　漁師、浜にて騒ぐ
第7段　船頭ら、牢輿を見つけ壊す
第8段　船頭ら、照手を櫓擢で打つ
第9段　太夫(漁夫の長)、照手を養子として引き取る
第10段　太夫の姥(妻)、照手を妬んで売ろうと言う
第11段　その発言に怒った太夫に、姥、取り繕う
第12段　姥、太夫の留守中に企てを思索する
第13段　姥、照手を蜑(あま、塩焼小屋か)に入れて燻すが、照手は千手観音の加護を受ける
第14段　姥、なおも美しい照手に腹立ち、売ることとする
第15段　姥、照手を六浦が浦の商人に売る
第16段　姥、太夫への言い訳を考える
第17段　姥、太夫へ嘘をついて泣く
第18段　太夫、姥に離縁を言い渡す
第19段　太夫、修行者となって山里へ籠る
第20段　売られて行く照手の行方(1)、釣竿の島
第21段　照手の行方(2)、鬼の塩谷
第22段　照手の行方(3)、岩瀬、水橋、六渡寺、氷見の町屋
第23段　照手の行方(4)、能登、珠洲の岬

《第10巻》

第1段　照手の行方(5)、よしはら、さまたけ、りんかうし、宮の腰
第2段　照手の行方(6)、もとをりこまつ
第3段　照手の行方(7)、三国湊
第4段　照手の行方(8)、敦賀の津
第5段　照手の行方(9)、海津の浦
第6段　照手の行方(10)、大津
第7段　照手、美濃国青墓の宿、万屋の君の長に買われる
第8段　照手、出身を常陸と話す
第9段　照手、常陸小萩と名付けられるが、遊女の勤めを断るために嘘をつく
第10段　照手、例え地の果てに売られても遊女の勤めはしない、と言う
第11段　君の長、十六人分の水仕の仕事と遊女の勤めのいずれかを照手に選ばせる
第12段　君の長、照手に水仕の仕事を命ずる
第13段　照手、百匹の馬の世話を命ぜられる
第14段　照手、百人の馬子の世話を命ぜられる
第15段　照手、遠くから清水を汲み上げて来るよう命ぜられる
第16段　照手、百人の遊女の世話を命ぜられる
第17段　照手、常に千手観音の加護を受ける
第18段　照手、念仏小萩とあだ名され、三年が過ぎる
第19段　小栗ら、冥途へ送られるが、閻魔大王は家来だけは娑婆へ戻すと裁くのに対し、家来ら、小栗一人を戻して欲しい、と訴える
第20段　大王、自分の家来に日本に小栗らの身体が残っているかの確認を命ずる
第21段　大王の家来、杖で虚空を一打ちして日本を見る
第22段　大王の家来、土葬にされた小栗一人の身体しか残っていないと報告する
第23段　大王、小栗の家来十人を自分の脇侍とする

《第11巻》

第1段　大王、小栗を婆婆に戻すにあたって、藤沢の上人に渡し、熊野本宮の湯の峯に入れてやるよう、胸札に書き添える
第2段　大王、杖で虚空を打つ
第3段　藤沢の上人、上野が原の小栗塚が割れたのを知る
第4段　上人、上野が原で、餓鬼姿で這い回る小栗を見つける
第5段　上人、小栗に餓鬼阿弥と名付け、土車を作り、これを引けば供養になると胸札に書き添える
第6段　上人、綱をつけて上野が原を出発する
第7段　相模畷では、横山家中の侍も、照手の供養にと車を引く
第8段　餓鬼阿弥の道中(1)、九日峠
第9段　餓鬼阿弥の道中(2)、酒匂の宿
第10段　餓鬼阿弥の道中(3)、おいその森
第11段　餓鬼阿弥の道中(4)、小田原、けはの橋
第12段　餓鬼阿弥の道中(5)、湯本の地蔵
第13段　餓鬼阿弥の道中(6)、足柄、箱根
第14段　餓鬼阿弥の道中(7)、山中三里、四つの辻
第15段　餓鬼阿弥の道中(8)、伊豆三島、浦島
第16段　餓鬼阿弥の道中(9)、三枚橋
第17段　餓鬼阿弥の道中(10)、浮島が原
第18段　餓鬼阿弥の道中(11)、吉原
第19段　餓鬼阿弥の道中(12)、富士の裾野
第20段　餓鬼阿弥の道中(13)、富士川
第21段　餓鬼阿弥の道中(14)、富士浅間
第22段　餓鬼阿弥の道中(15)、上人と別れる、藤沢へ
第23段　餓鬼阿弥の道中(16)、吹上六本松
第24段　餓鬼阿弥の道中(17)、清見が関、三保の松原、田子の浦

《第12巻》

第1段　餓鬼阿弥の道中(18)、袖師が浦
第2段　餓鬼阿弥の道中(19)、清見寺
第3段　餓鬼阿弥の道中(20)、江尻の細道
第4段　餓鬼阿弥の道中(21)、駿河の府内
第5段　餓鬼阿弥の道中(22)、浅間神社
第6段　餓鬼阿弥の道中(23)、鞠子の宿
第7段　餓鬼阿弥の道中(24)、宇津の谷峠
第8段　餓鬼阿弥の道中(25)、岡部畷
第9段　餓鬼阿弥の道中(26)、藤枝
第10段　餓鬼阿弥の道中(27)、島田の宿
第11段　餓鬼阿弥の道中(28)、大井川
第12段　餓鬼阿弥の道中(29)、菊川
第13段　餓鬼阿弥の道中(30)、小夜の中山
第14段　餓鬼阿弥の道中(31)、日坂峠
第15段　餓鬼阿弥の道中(32)、掛川
第16段　餓鬼阿弥の道中(33)、袋井畷
第17段　餓鬼阿弥の道中(34)、見付の郷
第18段　餓鬼阿弥の道中(35)、池田の宿
第19段　餓鬼阿弥の道中(36)、今切
第20段　餓鬼阿弥の道中(37)、潮見坂
第21段　餓鬼阿弥の道中(38)、吉田の今橋
第22段　餓鬼阿弥の道中(39)、五井のこた橋
第23段　餓鬼阿弥の道中(40)、赤坂
第24段　餓鬼阿弥の道中(41)、矢作の宿
第25段　餓鬼阿弥の道中(42)、三河の八橋
第26段　餓鬼阿弥の道中(43)、鳴海
第27段　餓鬼阿弥の道中(44)、とうこの地蔵
第28段　餓鬼阿弥の道中(45)、星が崎
第29段　餓鬼阿弥の道中(46)、熱田の宮
第30段　餓鬼阿弥の道中(47)、うたう坂、古渡
第31段　餓鬼阿弥の道中(48)、黒田
第32段　餓鬼阿弥の道中(49)、杭瀬川
第33段　餓鬼阿弥の道中(50)、小熊河原
第34段　餓鬼阿弥、美濃国の青墓の宿の君の長の屋敷前に三日間うち捨てられる
第35段　照手、餓鬼阿弥を見つける

第36段　照手、餓鬼阿弥の胸札を読み、小栗の供養に車を引くために三日間の暇を希望する
第37段　照手、君の長に父母の供養のためにと取り繕うことを考える
第38段　照手、君の長に三日間の暇を願い出る
第39段　君の長、照手の願い出を断る
第40段　照手、わが身に代えて君の長の罪を負うことを約束し、五日間の暇を許される
第41段　照手、車を引き始める
第42段　照手、狂女の姿に擬して車を引き、垂井の宿に着く
第43段　餓鬼阿弥と照手の道中(1)、長競、二本杉
第44段　餓鬼阿弥と照手の道中(2)、寝物語
第45段　餓鬼阿弥と照手の道中(3)、高宮川原

《第13巻》

第1段　餓鬼阿弥と照手の道中(4)、武佐の宿
第2段　餓鬼阿弥と照手の道中(5)、鏡の宿
第3段　餓鬼阿弥と照手の道中(6)、草津の宿
第4段　餓鬼阿弥と照手の道中(7)、野路、篠原
第5段　餓鬼阿弥と照手の道中(8)、瀬田の唐橋
第6段　餓鬼阿弥と照手の道中(9)、石山寺
第7段　餓鬼阿弥と照手の道中(10)、馬場松本
第8段　餓鬼阿弥と照手、西近江、上り大津を経て、関寺の門前玉屋に着く
第9段　照手、餓鬼阿弥の土車の轅を枕に、最後の夜を共に過す
第10段　照手、餓鬼阿弥の胸札に、本復の後は常陸小萩を訪ねるよう、書き添える
第11段　照手、餓鬼阿弥の車を見送る
第12段　照手、君の長のもとへ戻る
第13段　餓鬼阿弥の道中(1)、山科
第14段　餓鬼阿弥の道中(2)、粟田口
第15段　餓鬼阿弥の道中(3)、都
第16段　餓鬼阿弥の道中(4)、東寺、さんしや、四つの塚
第17段　餓鬼阿弥の道中(5)、鳥羽、恋塚
第18段　餓鬼阿弥の道中(6)、秋の山
第19段　餓鬼阿弥の道中(7)、桂川
第20段　餓鬼阿弥の道中(8)、山崎、千軒
第21段　餓鬼阿弥の道中(9)、広瀬
第22段　餓鬼阿弥の道中(10)、芥川、太田の宿
第23段　餓鬼阿弥の道中(11)、なかしま、三ほうしの渡り
第24段　餓鬼阿弥の道中(12)、天王寺
第25段　餓鬼阿弥の道中(13)、阿倍野
第26段　餓鬼阿弥の道中(14)、住吉四社
第27段　餓鬼阿弥の道中(15)、堺の浜
第28段　餓鬼阿弥の道中(16)、小松原
第29段　餓鬼阿弥の道中(17)、わたなべ、南部
第30段　餓鬼阿弥の道中(18)、四十八坂、なか井坂、いとか峠、蕪坂、鹿背
第31段　餓鬼阿弥の道中(19)、仏坂、こんか坂
第32段　餓鬼阿弥、こんか坂で難路のために置き去りにされる
第33段　餓鬼阿弥、大峯修行の行者に背負われて進む
第34段　餓鬼阿弥、四百四十四日めにとうとう熊野本宮湯の峯に入る
第35段　餓鬼阿弥、七日めに両眼が開く
第36段　餓鬼阿弥、十四日めに耳が聞こえ、二十一日めには話ができるようになる
第37段　餓鬼阿弥、四十九日経つともとの小栗の姿に戻る
第38段　小栗、熊野三山で修行に入り、山人に変化した熊野権現に二本の金剛杖を貰う
第39段　小栗、権現に礼拝する
第40段　小栗、都へ向かい、父・兼家の館前で斎料を求めて追い返される
第41段　東山の伯父御坊、修行者の小栗を見かける

《第14巻》

第1段　伯父御坊、兼家の御台に、修行者に斎料を与えるよう話す
第2段　門番、小栗を呼び返し、斎料を渡す
第3段　小栗、母に名乗り、三年間の勘当の許しを求める
第4段　兼家、小栗なら調法が受けられるだろうと考える
第5段　兼家、障子の向こうから矢を放つが、小栗、これを受け止める
第6段　小栗、父に名乗り、勘当の許しを求める

第7段　兼家は喜び、父子で帝の館へ参上する
第8段　帝、小栗に五畿五国を与えようと言うが、小栗はこれを断り、美濃国を頂きたいと言う
第9段　小栗、五畿五国と美濃国を頂き、喜び祝う
第10段　小栗、奉公する者を募ると、三千人が集まる
第11段　小栗、美濃国へ赴いて君の長の館を宿とすると知らせたため、君の長、百人の遊女に飾らせて小栗の到着を待つ
第12段　小栗の一行、君の長の館に着く
第13段　小栗、君の長夫婦に、常陸小萩に酌に来させるよう命ずる
第14段　君の長、照手に酌を申し付けるが、照手、これを断る
第15段　君の長、照手が断れば、我々に悪事が及ぶと話す
第16段　照手、酌に行くことを承知する
第17段　君の長、十二単衣で飾るように言うが、照手は水仕の姿のままでと断る
第18段　照手、襷がけに前垂れ姿のままで酌に向かう
第19段　小栗、照手に自分の身の上を話す
第20段　照手、小栗に自分の身の上を話し、互に逢えたうれしさのあまりに号泣する
第21段　小栗、君の長の照手に対する扱いを知り、死刑にすると言う

《第15巻》

第1段　照手、君の長は五日の暇を与えて下さったから、むしろ褒美を与えるようにとりなす
第2段　小栗、君の長に美濃国の領地などを与える
第3段　君の長、三十二人の遊女を選りすぐり、照手の侍女に従わせる
第4段　常陸に戻った小栗、横山を攻めると告げる
第5段　横山、小栗の攻撃に備えをする
第6段　照手、小栗に父母への逆罪を行うなら、自分を殺すよう訴えたので、小栗、妻に免じて横山を許す
第7段　照手、内密の書状を横山に送る
第8段　横山、わが子にまさる宝はない、と悔む
第9段　横山、鬼鹿毛に黄金を積んで、小栗のもとへ遣わす
第10段　三郎、小栗の前に引き出される
第11段　小栗、黄金で御堂と寺を建て、鬼鹿毛を馬頭観音として祀る
第12段　三郎、荒筵に巻かれる
第13段　三郎、西の海に沈められる
第14段　小栗、ゆきとせが浦の姥を鋸引きに処し、太夫には褒美を与える
第15段　小栗、常陸国へ戻り、富み栄える
第16段　小栗、八十三歳で大往生する
第17段　小栗、神や仏に供養される
第18段　小栗、美濃国安八郡の墨俣、垂井のおなことの神体・正八幡の荒人神として祀られる
第19段　照手、その近くに縁結びの神として祀られる

〔資料2〕各巻の法量

巻	紙数	幅(cm)
第1巻	見返し	40.2
	第1紙	96.4
	第2紙	96.2
	第3紙	96.1
	第4紙	96.8
	第5紙	97.1
	第6紙	97.0
	第7紙	96.4
	第8紙	95.3
	第9紙	96.5
	第10紙	95.7
	第11紙	94.7
	第12紙	94.4
	第13紙	94.3
	補紙	28.0
	本紙長	1246.9
	総長	1315.1
第2巻	見返し	41.6
	第1紙	96.0
	第2紙	95.5
	第3紙	95.2
	第4紙	95.8
	第5紙	96.1
	第6紙	95.5
	第7紙	95.8
	第8紙	94.7
	第9紙	94.8
	第10紙	94.8
	第11紙	95.4
	第12紙	94.0
	第13紙	95.2
	補紙	29.5
	本紙長	1238.8
	総長	1309.9
第3巻	見返し	40.5
	第1紙	96.6
	第2紙	97.5
	第3紙	96.0
	第4紙	95.6
	第5紙	96.2
	第6紙	96.4

巻	紙数	幅(cm)
	第7紙	96.0
	第8紙	96.4
	第9紙	96.2
	第10紙	96.8
	第11紙	96.3
	第12紙	95.8
	第13紙	95.0
	補紙	29.0
	本紙長	1250.8
	総長	1320.3
第4巻	見返し	39.7
	第1紙	97.4
	第2紙	96.5
	第3紙	95.7
	第4紙	95.7
	第5紙	95.2
	第6紙	96.5
	第7紙	97.1
	第8紙	95.4
	第9紙	95.7
	第10紙	97.0
	第11紙	95.8
	第12紙	95.4
	第13紙	95.7
	補紙	29.0
	本紙長	1249.1
	総長	1317.8
第5巻	見返し	40.3
	第1紙	96.4
	第2紙	96.0
	第3紙	95.7
	第4紙	95.6
	第5紙	95.6
	第6紙	95.7
	第7紙	96.2
	第8紙	96.2
	第9紙	94.9
	第10紙	95.2
	第11紙	95.2
	第12紙	94.7
	第13紙	95.2

巻	紙数	幅(cm)
	第14紙	95.7
	第15紙	96.0
	第16紙	96.2
	第17紙	95.2
	第18紙	95.5
	第19紙	95.2
	第20紙	96.3
	第21紙	97.2
	第22紙	96.5
	第23紙	95.8
	第24紙	95.5
	第25紙	95.7
	第26紙	95.2
	補紙	30.0
	本紙長	2488.6
	総長	2558.9
第6巻	見返し	40.0
	第1紙	95.4
	第2紙	95.5
	第3紙	95.7
	第4紙	96.6
	第5紙	95.8
	第6紙	95.9
	第7紙	96.7
	第8紙	96.5
	第9紙	96.4
	第10紙	96.7
	第11紙	96.2
	第12紙	96.1
	第13紙	95.3
	第14紙	96.1
	第15紙	96.4
	第16紙	95.8
	第17紙	95.2
	第18紙	96.1
	第19紙	96.1
	第20紙	96.6
	第21紙	96.5
	第22紙	96.6
	第23紙	96.6
	第24紙	96.2

巻	紙数	幅(cm)
	第25紙	96.2
	第26紙	94.8
	補紙	29.8
	本紙長	2498.0
	総長	2567.8
第7巻	見返し	40.0
	第1紙	95.9
	第2紙	96.8
	第3紙	96.3
	第4紙	96.8
	第5紙	97.3
	第6紙	97.2
	第7紙	96.8
	第8紙	97.0
	第9紙	97.0
	第10紙	97.6
	第11紙	96.9
	第12紙	97.2
	第13紙	95.5
	第14紙	95.4
	第15紙	95.8
	第16紙	97.0
	第17紙	96.8
	第18紙	96.0
	第19紙	96.3
	第20紙	96.4
	第21紙	96.2
	第22紙	97.4
	第23紙	97.0
	第24紙	96.1
	第25紙	95.4
	第26紙	95.3
	補紙	28.7
	本紙長	2509.4
	総長	2578.1
第8巻	見返し	39.7
	第1紙	93.6
	第2紙	95.6
	第3紙	94.5
	第4紙	94.9
	第5紙	94.9

巻	紙数	幅(cm)
	第９紙	96.8
	第10紙	96.8
	第11紙	96.5
	第12紙	95.2
	第13紙	95.1
	第14紙	94.6
	第15紙	95.7
	第16紙	95.8
	第17紙	95.9
	第18紙	96.3
	第19紙	95.7
	第20紙	95.5
	第21紙	94.9
	第22紙	95.2
	第23紙	95.8
	第24紙	95.3
	第25紙	95.8
	第26紙	95.0
	補紙	29.0
	本紙長	2489.8
	総長	2560.2
第13巻	見返し	40.1
	第１紙	94.8
	第２紙	96.2
	第３紙	96.0
	第４紙	96.3
	第５紙	96.9
	第６紙	95.9
	第７紙	96.0
	第８紙	97.2
	第９紙	96.6
	第10紙	96.7
	第11紙	97.2
	第12紙	96.8
	第13紙	96.3
	第14紙	94.2
	第15紙	96.7
	第16紙	94.7
	第17紙	96.9
	第18紙	96.5
	第19紙	95.7

巻	紙数	幅(cm)
	本紙長	2475.7
	総長	2543.8
第11巻	見返し	39.1
	第１紙	95.3
	第２紙	97.4
	第３紙	92.5
	第４紙	95.6
	第５紙	96.7
	第６紙	96.6
	第７紙	96.1
	第８紙	96.0
	第９紙	95.8
	第10紙	96.1
	第11紙	96.5
	第12紙	95.8
	第13紙	95.6
	第14紙	94.8
	第15紙	95.5
	第16紙	96.1
	第17紙	96.1
	第18紙	96.8
	第19紙	96.5
	第20紙	95.2
	第21紙	96.2
	第22紙	95.9
	第23紙	96.3
	第24紙	96.3
	第25紙	96.0
	第26紙	96.0
	補紙	30.0
	本紙長	2493.7
	総長	2562.8
第12巻	見返し	41.4
	第１紙	95.0
	第２紙	96.2
	第３紙	96.5
	第４紙	96.5
	第５紙	96.1
	第６紙	96.2
	第７紙	95.7
	第８紙	95.7

巻	紙数	幅(cm)
	第17紙	96.2
	第18紙	95.7
	第19紙	96.4
	第20紙	97.0
	第21紙	95.2
	第22紙	97.1
	第23紙	94.6
	第24紙	94.7
	第25紙	95.4
	第26紙	94.8
	補紙	29.0
	本紙長	2486.1
	総長	2555.3
第10巻	見返し	39.1
	第１紙	93.9
	第２紙	96.7
	第３紙	94.8
	第４紙	96.0
	第５紙	95.2
	第６紙	95.1
	第７紙	95.0
	第８紙	95.7
	第９紙	97.3
	第10紙	94.8
	第11紙	95.6
	第12紙	94.7
	第13紙	95.2
	第14紙	94.3
	第15紙	96.3
	第16紙	96.2
	第17紙	96.2
	第18紙	96.3
	第19紙	96.2
	第20紙	89.6
	第21紙	88.0
	第22紙	97.0
	第23紙	96.8
	第24紙	96.8
	第25紙	96.0
	第26紙	96.0
	補紙	29.0

巻	紙数	幅(cm)
	第６紙	94.8
	第７紙	95.4
	第８紙	96.4
	第９紙	96.1
	第10紙	96.6
	第11紙	94.1
	第12紙	95.2
	第13紙	96.1
	第14紙	95.2
	第15紙	96.9
	第16紙	96.7
	第17紙	95.1
	第18紙	95.7
	第19紙	96.0
	第20紙	95.3
	第21紙	95.4
	第22紙	95.4
	第23紙	95.9
	第24紙	94.5
	第25紙	95.4
	第26紙	95.2
	補紙	29.0
	本紙長	2480.9
	総長	2549.6
第９巻	見返し	40.2
	第１紙	94.6
	第２紙	96.6
	第３紙	96.0
	第４紙	95.9
	第５紙	96.4
	第６紙	96.4
	第７紙	95.5
	第８紙	94.8
	第９紙	95.2
	第10紙	95.5
	第11紙	94.4
	第12紙	95.8
	第13紙	95.7
	第14紙	94.6
	第15紙	96.8
	第16紙	94.8

巻	紙数	幅(cm)
第15巻	見返し	40.2
	第１紙	95.3
	第２紙	96.7
	第３紙	95.8
	第４紙	96.8
	第５紙	95.0
	第６紙	96.2
	第７紙	96.7
	第８紙	95.8
	第９紙	94.8
	第10紙	95.8
	第11紙	97.0
	第12紙	96.9
	第13紙	95.7
	第14紙	95.6
	第15紙	96.8
	第16紙	96.6
	第17紙	96.6
	第18紙	96.2
	第19紙	96.8
	第20紙	95.8
	第21紙	96.1
	第22紙	96.0
	第23紙	96.5
	第24紙	95.7
	第25紙	96.9
	第26紙	95.3
	補紙	29.0
	本紙長	2499.4
	総長	2568.6
全15巻	本紙長	32398.1
	総長	33437.8

巻	紙数	幅(cm)
	第20紙	95.8
	第21紙	96.0
	第22紙	95.9
	第23紙	95.9
	第24紙	95.6
	第25紙	96.5
	第26紙	94.2
	補紙	29.0
	本紙長	2497.5
	総長	2566.6
第14巻	見返し	40.5
	第１紙	93.8
	第２紙	95.8
	第３紙	95.9
	第４紙	97.0
	第５紙	95.6
	第６紙	96.0
	第７紙	97.1
	第８紙	96.2
	第９紙	96.2
	第10紙	95.5
	第11紙	96.8
	第12紙	95.8
	第13紙	95.2
	第14紙	95.0
	第15紙	97.0
	第16紙	96.2
	第17紙	95.5
	第18紙	95.3
	第19紙	95.5
	第20紙	95.1
	第21紙	96.1
	第22紙	96.0
	第23紙	96.7
	第24紙	96.4
	第25紙	96.2
	第26紙	95.5
	補紙	29.1
	本紙長	2493.4
	総長	2563.0

をくり—伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻
三の丸尚蔵館展覧会図録No.8

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　印象社
翻訳　鶴岡厚生
発行　宮内庁
平成七年七月八日発行

©1995, Museum of The Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

をくり―伝岩佐又兵衛の小栗判官絵巻
三の丸尚蔵館展覧会図録No.8

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　印象社
翻訳　鶴岡厚生
発行　宮内庁
平成七年七月八日発行

©1995, Museum of The Imperial Collections

Illustrated Scroll *Okuri*

Illustrations attributed to Iwasa Matabei
Early Edo Period (17th century)
In 15 Volumes
Height: 33.8–34.0 cm; Length: 1,238.8–1250.8 cm (Vols. 1–4); 2,475.7–2,509.4 cm (Vols. 5–15)

Sekkyobushi are moralistic narrative songs which enjoyed popurality in Japan in the Middle Ages and after. Originally designed to propagate Buddhist teachings among the general public, *sekkyobushi* gradually came to incorporate local legends and folk beliefs as lowly monks and priests – and later itinerant entertainers – tried to give extra flavors to their tuneful recitations. By the premodern era, *sekkyobushi* had been firmly linked up with *joruri* ballad dramas and *kabuki* theater and had enjoyed immense popularity. Based on a *sekkyobushi* entitled *Okuri*, the present illustrated scroll tells the story of Oguri and Terute – a story frequently featured in *ningyo-joruri* puppet dramas at the beginning of the Edo period.

The illustrated scroll has been attributed to Iwasa Matabei (1578–1650; also known as Ukiyo Matabei), a painter well known for his highly unique approaches to his subject matters and art techniques as well as for his indifference toward the mainstream schools of art of the day, such as the Kano and Tosa schools. Of his works, illustrated scrolls are all of a gigantic scale boasting of elaborately-painted gorgeous scenes. It is now generally believed that Iwasa Matabei created all his illustrated scrolls in his studio with the help from his disciples.

The outline of the story of the illustrated scroll is as follows:

Oguri, the protagonist of the story, is born as the heir to Nijo Kaneie, a Kyoto court noble, and *Vaisravans's* god-sent. When he grows up, he gets involved with a beautiful woman who is actually an incarnation of a monster serpent of a great deep pond. As rumors of this ungodly union spread throughout Kyoto, the father has no way but to send Oguri away to the far Province of Hitachi.

In Hitachi, hearing from a merchant called Goto Saemon about Terute, a beautiful single daughter of Yokoyama, the chief magistrate of the two provinces of Sagami and Musashi, Oguri sends a loveletter to her. Getting a favorable response from the girl, Oguri goes on to marry her without her father's consent. Enraged by the affront, Yokoyama, the father, tries to have Oguri destroyed by the man-eating horse Onikage. Instead of being eaten, however, Oguri deftly jumps on the horse and successfully rides him. Frustrated, Yokoyama invites Oguri to a banquet and murders him with poison. Now that Yokoyama has killed another man's son, he feels compelled to put his own daughter Terute to death, too. Fortunately, Terute is saved, but is sold to various places. Finally, she ends up in an inn in a place called Aohaka in the Province of Mino and is forced to do arduous kitchen work.

Oguri, in the meantime, is brought to the presence of the King of Hell, who orders him back to the living world in the form of a hungry ghost. In order to regain his former self, Oguri has to be borne on an earth-carrying wagon along the Tokaido highway as far away as to the mountainous Yunomine where the Grand Shrine of Kumano is located. When she sees the ghastly carriage in her neighborhood, Terute gets a leave of absence of five days from the inn and helps to move the wagon as far as to Otsu as a form of memorial service to the dead Oguri whom she believes to be still in Hell. Oguri's wagon-borne journey further continues to Kyoto and Osaka and from thence a mountain ascentic takes over and carries the ghost on his back up Mt. Omine. Oguri finally reaches Yunomine, the seat of the Grand Shrine of Kumano, on the 444th day of his journey. After spending 49 days there, Oguri is finally allowed to regain his former self.

Later, Oguri goes back to Kyoto and reveals himself to his parents and then presents himself to the Emperor. Afterward, Oguri goes to the Province of Mino and has a tearful meeting with Terute. From then on, Oguri enjoys great prosperity and lives to the venerable age of 83. Upon his death, Oguri gets deified at Onakoto Shrine in the Province of Mino, while Terute also is deified at a nearby shrine as a goddess of matrimony.

(Translated by Atsuo Tsuruoka)

Foreword

Among all the illustrated scrolls owned by this museum, *Okuri* (*Illustrated Scroll of Oguri Hangan*), definitely one of the masterpieces of the early pre-modern era, stands out for its immense length running up to approximately 324 long meters in 15 volumes. Another remarkable fact about this illustrated scroll is that it has been attributed to Iwasa Matabei Katsumochi, also known as Ukiyo Matabei, who, in the early Edo period, developed a unique artistic style of his own by freely using a variety of art techniques depending upon the particular subject matters selected and whose illustrated scrolls are widely known for their elaborate colors, their exuberant elegance and their immense lengths. Unfortunately, however, *Okuri* has so far had little opportunity of being displayed in its entirety and has largely remained one of the former *Gyobutsu* Imperial masterpieces known only by their names. At the present exhibition, special efforts have been made to show the illustrated scroll based on a *sekkyobushi* moralistic narrative song at its best through especially brilliant scenes selected from each of the 15 volumes arranged in such a manner as to enable the viewers to follow the story without undue effort.

With its texts written in the enchanting phraseology of the *ningyo-joruri* puppet show songs, the illustrated scroll unfolds with a bouncing sense of rhythm and the characters appearing in it have an inimitable lifelikeness. The fascinatingly vivid and detailed delineation of the scenes in the scroll may very well remind the viewers of the present-day *gekiga* dramatic comics.

We shall be immensely gratified if the present exhibition will lead to further detailed studies on the *sekkyobushi* song *Okuri* and on the artist Iwasa Matabei in various scholastic circles and to acquaint the general viewers of the unique joys and charms of illustrated scrolls.

July 1995

Museum of The Imperial Collections

Okuri

—— Illustrated Scroll of Oguri Hangan ——

July 8 — September 10, 1995

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan